

7 朝鮮半島における造瓦技術の変遷

亀田 修一

(岡山理科大学)

A はじめに

朝鮮半島における瓦の使用は、楽浪郡などにおいて始まったと考えられている。当然のことながら、中国の漢の影響と考えられる。その後、漢の滅亡後も、中国の影響下、一部楽浪郡などにおける独自の展開(?)のなかで瓦が作られ、使用されているようである。

その一方、高句麗が国家としての体制を整えていく中で、4世紀前半のころから集安において瓦の使用が始まる。この瓦には東晋の年号があり、当然、その関わりのもとでの造瓦が推測されるのであるが、4世紀中ごろから、その後の高句麗瓦を代表する蓮蕾文軒丸瓦が作られ、使用されるようになる。その後の展開において中国からの新たな影響があるのか、それとも独自に展開したのかは詳しくわからないが、一部、中国との関わりはありそうである。そして、この高句麗における瓦作りは、朝鮮半島南部地域の百済や新羅に影響を与えている。

ただ、百済の漢城時代における初期の瓦作りは、高句麗や楽浪郡の瓦作りの影響だけでなく、中国本土からの影響もかなりありそうなのがわかってきている。そして、475年の熊津遷都以後の瓦は、漢城時代のものとは大きく異なり、新たな影響が中国南朝から入ってきたものと考えざるをえないようである。538年の泗沘遷都後もそうした百済瓦の流れは続くが、660年の百済滅亡まで、百済のなかでの展開とともに、新たな影響が入ってきていることも間違いないようである。

新羅は、朝鮮三国の中で最も遅れて瓦が使用されるようになるが、その地理的な位置からも高句麗・百済の瓦の影響下に始まったことがわかっている。そして、新羅独自の展開をするとともに、中国からの影響も認められそうなのが判明しつつある。さらに、7世紀後半には新たに唐の影響も入ってきているようであり、文様・技法面での検討が進みつつある。

小稿では、このような朝鮮半島における瓦、とくに造瓦技術の変遷に注目して述べていきたい。なお、基本的に、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦のみを対象とすることをお断りしておく。

B 楽浪郡の瓦

楽浪郡は、漢の元封3年(B.C.108)に武帝によって設置され、A.D.313年に高句麗によって滅ぼされるまで続く。その郡治跡が平壤の楽浪土城と考えられており、ここで扱う楽浪瓦はこの

土城を中心に出土したものであるが、帯方郡治跡と推測されている黄河北道の智塔里土城などで出土する瓦も含んでいる。

楽浪郡の瓦に関しては、井内潔（1976）、井内功（1977）、井内古文化研究室（1981）、谷豊信（1984）などの研究があり、以下、これらによりながら見ていこう。基礎資料は、朝鮮総督府（1925・1927）、井内古文化研究室（1976a）などによる。

まず、楽浪郡の瓦には軒平瓦はなく、軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。

軒丸瓦 瓦当文様は、蕨手文、文字、四葉文、三角形文などがあり、蕨手文が最も多い。文様構成としては、丸く半球形に盛り上がった中房から外に向かう1～2本の区画線によって4区に区画され、そのなかに蕨手文や文字を配したものが基本である。文字は「楽浪禮官」（図1－1）「楽浪富貴」「大晋元康」（図1－2）「千秋萬歳」「萬歳」「大吉宜官」などがあり、「千秋萬歳」が最も多いようである。

井内・谷は、楽浪の軒丸瓦の製作技法を次のように分けている。

1. 瓦当嵌め込み技法（谷 A2 技法）
2. 接着技法
 - └─ 粘土円筒接着技法（谷A1技法）
 - └─ 丸瓦接着技法（芋つけ技法）（谷B1技法）
3. 印籠つぎ技法（谷 B1 技法）
4. 一本造り技法（谷 A3 技法）

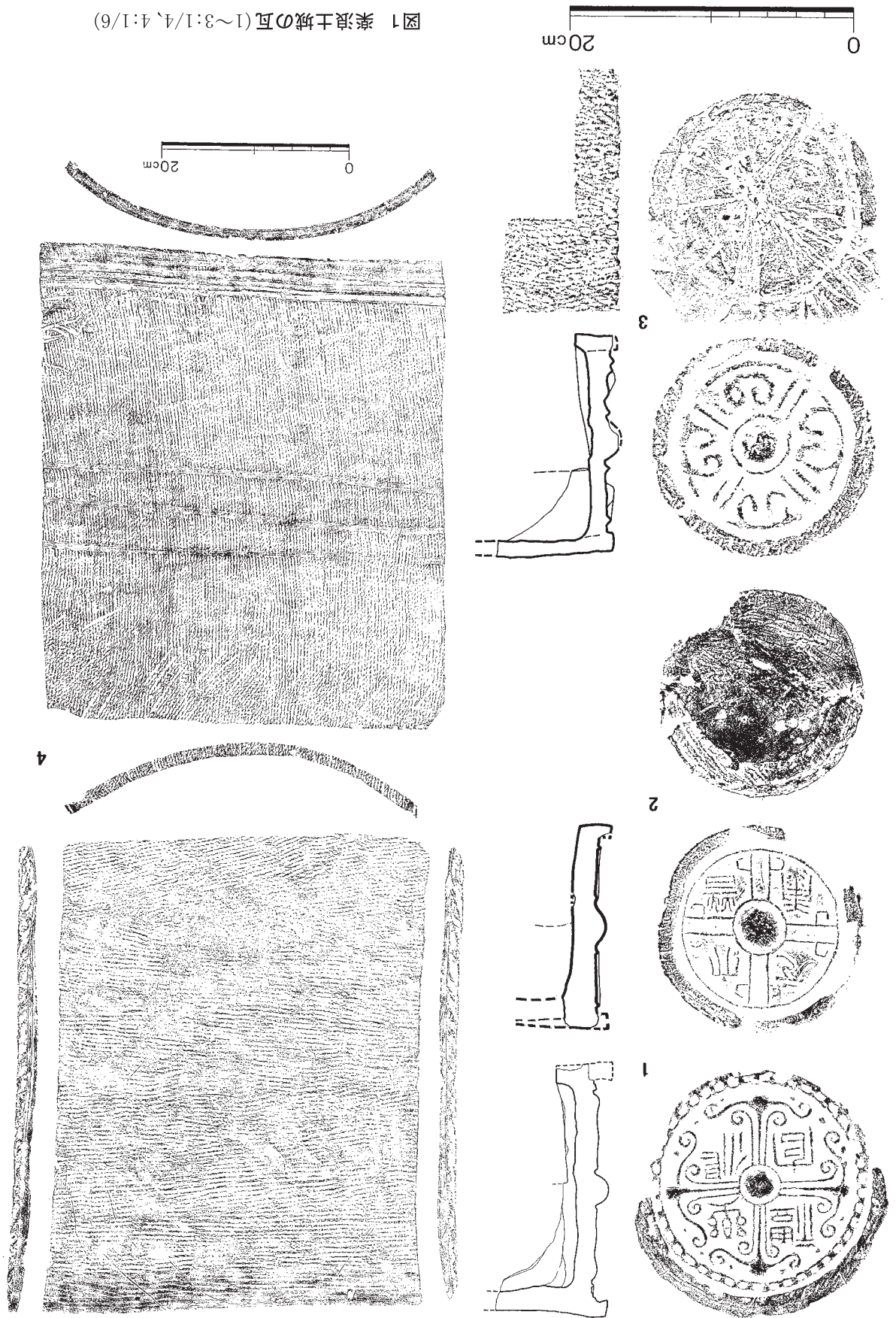
（＊谷 B2 技法：瓦当上部に丸瓦を被せ、それが外縁になる。）

井内は、その主流は瓦当嵌め込み技法と粘土円筒接着技法であったと述べている。瓦当嵌め込み技法は「模骨からはずした粘土円筒に瓦当を嵌め込むようにして接合させ、しかるのちに円筒のほぼ半分にあたる不要部分を切り捨てて鐙瓦を造る方法」であり、粘土円筒接着技法は「粘土円筒を瓦当の裏面にあてがうようにして接合させ、のちに円筒の半部分を切り捨てて鐙瓦を造る方法」であると述べている。

そして谷によれば、A1、A2 技法には泥条盤築技法を使用したものがあるようである。

これらの軒丸瓦の技法の時期について、谷は、まず泥条盤築技法による丸瓦を B2 技法で接合した「萬歳」銘軒丸瓦が後漢前半、桶巻作りによる丸瓦を接着（芋つけ）・印籠つぎ（B1）技法で接合した「千秋萬歳」「大晋元康」銘軒丸瓦が魏晋代のものとした。そして、後漢前半までは泥条盤築技法による瓦が主に使用され、桶巻作りの布目瓦は後漢半ば以降に普及したものと考えている。図1－2の「大晋元康」銘軒丸瓦の瓦当裏面上部には、丸瓦先端部につけた接合用のキズのスタンプが残っている。

また、いわゆる一本造り（A3）技法による瓦（図1－3）については、谷は胎土の多量の滑石粒と布目の特徴が木槨墓の土器と類似することから、前漢後半～後漢前半の可能性を考えながらも、模骨の使用の面では下がる可能性を考えている。一方、井内は、楽浪郡終末期に粘土円筒接着技法から派生したものと考えている。



その他 丸瓦の形態では、玉縁式のもの確認したが、行基式は未確認である。

丸瓦・平瓦の製作技法には、内型を使用するものと、土器の甕作りのように粘土紐を巻き上げて作る、いわゆる泥条盤築技法によるものがともにある。前者の凸面は叩き文様やナデ、凹面は内型と布目の痕跡が残り、後者の凸面は叩き文様やナデ、凹面は当て具の痕跡やナデが残ることが一般的である（図1-4）。

叩き文様は基本的に縄目文で、凹面の当て具も縄目文が一般的なようである。ただ、一部凹面の当て具に格子目状の文様を残すものがある（井内 1981、PL.8-27）。叩き板には、長さ 10 cm ほどの短板と 20 cm ほどの中板があるようだが、長板はよくわからない（崔兌先 1993）。

C 高句麗の瓦

高句麗は、『三国史記』によれば B.C.37 年に建国され、668 年に唐・新羅連合軍に滅ぼされるまで続いた。その王都は、現在の中国の桓仁から集安、そして朝鮮民主主義人民共和国の平壤に移動したことが知られている。高句麗で瓦が最初に使用された場所は、現時点では集安と考えられており、4 世紀前半頃には使用されていたものとみられている。

高句麗瓦に関しては、谷豊信（1989・1990）の研究がまとまっている。また、井内古文化研究室（1981）もよく整理されている。近年では、中国において『集安高句麗王陵』（吉林市文物考古研究所・集安市博物館 2004）などが刊行され、基礎資料が蓄積されつつある。一方、韓国でも白種伍『高句麗瓦の成立と王権』（2006）が刊行されるなど、新たな展開が見られる。

ただ、残念ながら、筆者は高句麗瓦の実物をさほど見ていないため、ここでは上記の研究成果によりながら述べていきたい。

基礎資料は、朝鮮総督府（1929）、井内古文化研究室（1976b）、吉林市文物考古研究所・集安市博物館（2004）などによる。

高句麗瓦は、集安地域、平壤地域その他で、古墳、寺院、宮殿、山城などから出土している。瓦の種類としては、軒丸瓦、軒平瓦（と考えられるもの）、半瓦当、鳥衾瓦、丸瓦、平瓦、鷗尾、鬼瓦、面戸瓦などがある。

軒丸瓦 軒丸瓦の瓦当文様には、卷雲文（蕨手文）、蓮蕾文、蓮華文、忍冬文、鬼面文、重圈文などがある。

卷雲文（蕨手文）は集安地域に見られるものである。基本的な文様としては、中房はあまり高くはないが、半球形に盛り上がり、そこから区画線によって内区が4分割され、その中に卷雲文（蕨手文）が配されている。外区には鋸歯文を配したものがある。そして、その内区卷雲文と外区鋸歯文の間に文字が記されたものがある。文字は「太寧四年太歳□□閏月六日己巳造吉保子宜孫」（図2-1）、「太寧□年四月造作」、「己丑年□□于利作」（西大塚、図2-2）、「戊戌年造瓦故記歳」（禹山 992 号墓）、「□四時興詣□□□萬世太歳在丁巳五月廿日」などがあり、これらの年号に関しては、「太寧」は東晋の年号で3年までしかないという問題もあるが、基本

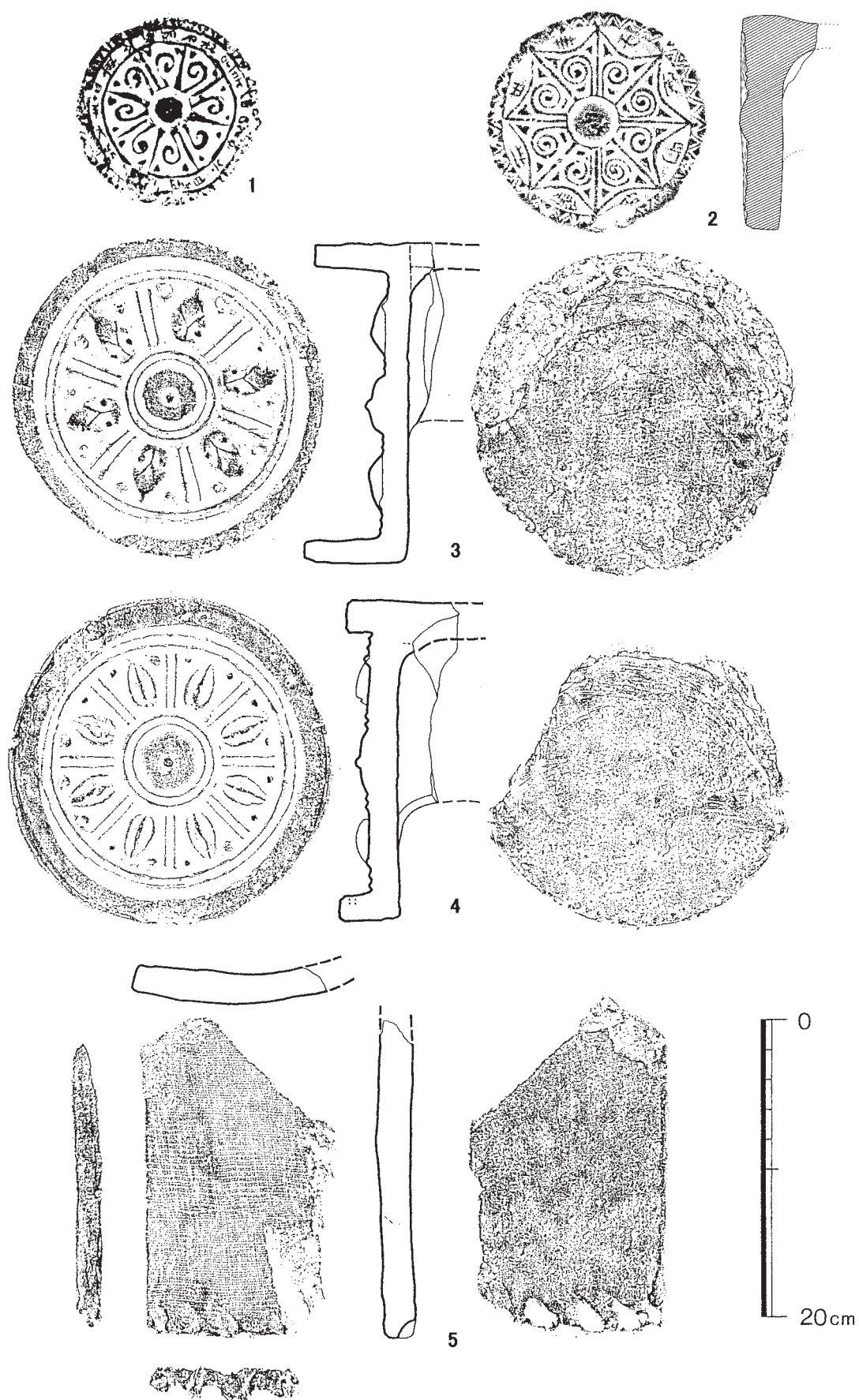


図2 高句麗の軒瓦(1/4) 1:集安県城浴池、2:西大塚、3:太王陵、4・5:將軍塚

的にこの時期、つまり太寧4年(326)、そして「己丑」は329年、「戊戌」は338年、「丁巳」は357年と考えられている(林・耿1985、吉林市・集安市2004)。

これらの製作技法に関してはよくわからないが、基本的には、瓦当裏面最上部に丸瓦をそのまま(?)接合しているようである。補強粘土は少ないようである。

「己丑年□□于利作」(329年)銘巻雲文軒丸瓦が出土した西大塚では、一部に蓮蕾文軒丸瓦もあるが、基本的に巻雲文軒丸瓦であり、ここでは端部に指頭圧痕などをもつ軒平瓦(?)や玉縁式丸瓦が出土する。「戊戌年造瓦故記歳」(338年)銘巻雲文軒丸瓦が出土した禹山992号墓では、巻雲文軒丸瓦が大多数で、一部、蓮蕾文軒丸瓦が出土し、ほかに玉縁式丸瓦と縄目文・格子目文の平瓦があるが、軒平瓦は出土していないようである。

巻雲文軒丸瓦のなかで、内区～外区に文字をもたないものが千秋墓(千秋塚古墳)で出土しているが、ここでは蓮蕾文軒丸瓦がまとまって出土している。ただ、この蓮蕾文は、集安王陵群で出土する蓮蕾文の中では最古のものではない可能性があり、巻雲文から蓮蕾文へ、いつどのようにかわっていくのかは、もう少し検討が必要なようである。

これらの年号を記した巻雲文軒丸瓦は、集安地域の宮殿や古墳などで使用されており、4世紀前半から中葉にかけて、このような漢や楽浪郡の瓦とつながるような瓦が、高句麗の初期の瓦として使用されていたことがわかる。そして、王陵群のあり方からも、4世紀後半に巻雲文軒丸瓦から蓮蕾文軒丸瓦へかわっていったようである。

蓮蕾文軒丸瓦の文様変遷については、谷豊信が検討しており、太王陵A型(4世紀中頃～後半中葉)(図2-3)→千秋塚A型(4世紀後半～末)→將軍塚型(5世紀初頭頃)(図2-4)と考えている(谷1989)。筆者も基本的にこの流れで問題ないと考えているが、集安王陵群における巻雲文軒丸瓦との関係はやや複雑である。墓の再利用や改築、のちの祭祀など、今後の検討が必要なようである。

この段階以降の高句麗瓦は、基本的に、前述の蓮蕾文を中心として、多様な文様が展開する。蓮華文には、複弁も少ないながら存在する。さらに、蓮蕾文、蓮華文、忍冬文などを交互に配するものもある。

また、輻線で区画するものが多く見られ、弁数は四弁、六弁、八弁がある。百済、新羅の瓦と比較すると、六弁が比較的多いようである。そして、弁間に珠文を配するものが多い。

中房は基本的に半球形に盛り上がり、その中央に蓮子を1個置くものが多い。また輻線で区画してそのなかに蓮子を入れるもの、中央の蓮子のまわりに圏線をめぐらし、その外側に蓮子を配するものなどもある。そして中房の外側に圏線をめぐらすものが多い。

外区外縁(周縁)は基本的に素文である。

範型についてはよくわからないが、側面までかぶるものは確認できていない。また範型自体は、木製のものの存在が範キズなどから推測できるが、日本などで一般的な、直線的な木目痕跡だけではなく、同心円状の年輪(木目)が確認できる例があり、木取りが異なるものがある

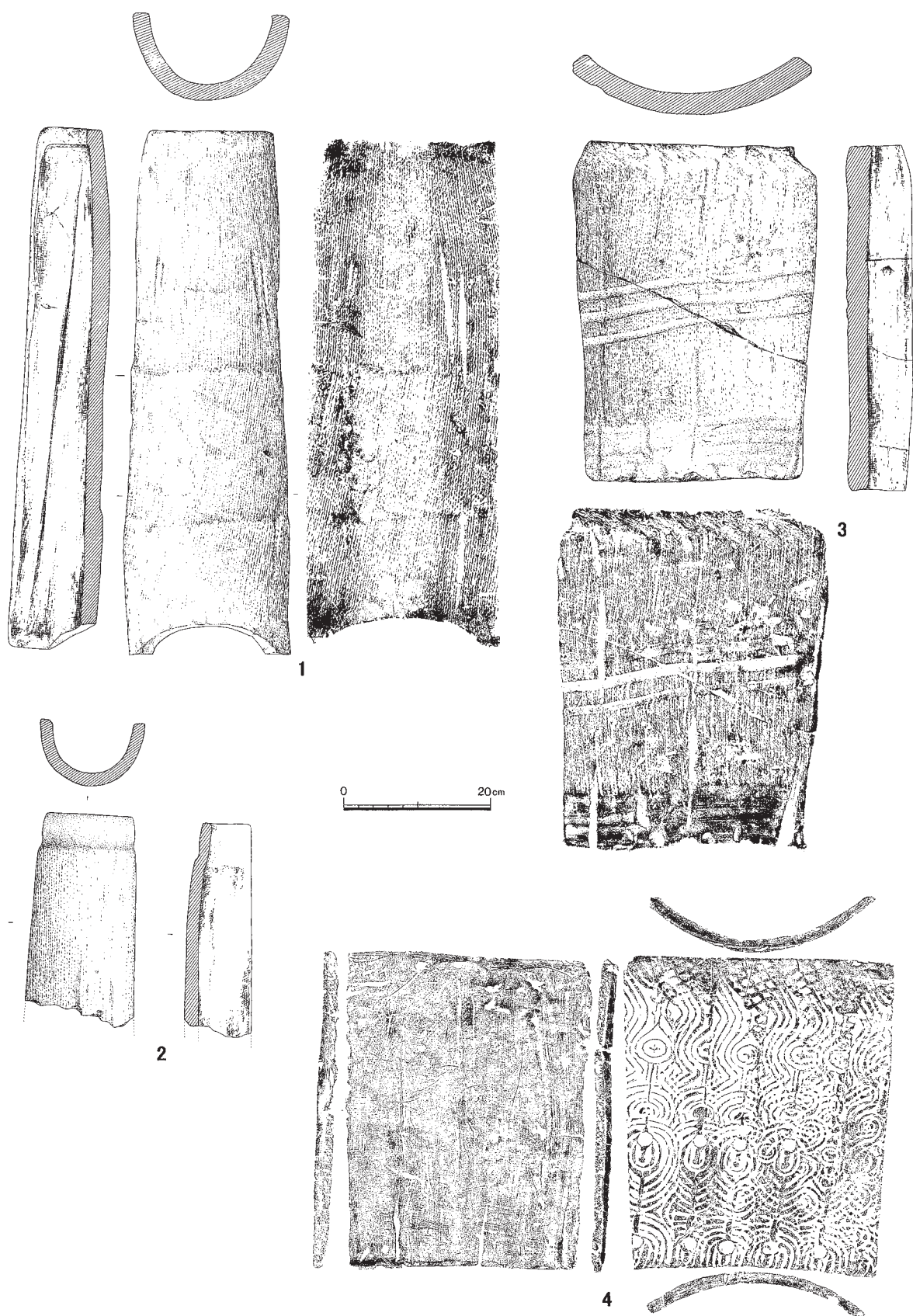


図3 高句麗の丸瓦・平瓦(1/8) 1~3:禹山2110号墓、4:平壤

ようである（井内古文化研究室 1976、PL.28-112、朝鮮総督府 1929、図 28・95 など）。

軒丸瓦の瓦当部と丸瓦の接合においては、板（櫛）状工具で数本単位、またはヘラ状工具で 1 本ずつ、瓦当裏面最上部や丸瓦先端部などにキズを入れたものが比較的多く見られる。丸瓦先端側凸面をヘラケズリしたものもある。また、接合用の段（溝もあるかもしれない）もある。丸瓦円筒を瓦当裏面に接合したのちに、丸瓦部を半截するものもあるようである。

軒平瓦 軒平瓦として明確なものは確認されていないが、集安の高句麗墳墓などでは、端部を指や工具で押した平瓦がある（図 2-5）。これが軒平瓦であるのか、単なる平瓦であるのかはよくわからない。これらと共伴するもので、端部になんの施文がない平瓦がどの程度あるのか、知りたいところである。もし軒平瓦であるならば、階段式の墓の段部に使用すると推測されることから、施文があるものとなないものの差はあまり大きくはないのかもしれない。型押し

その他 また高句麗瓦の技法的な特徴の一つとして挙げられそうなものが、瓦当面や瓦当裏面、平瓦凸面などに施された離れ砂である。少なくとも、三国時代の百済や新羅の瓦については、離れ砂を筆者は確認していない。

瓦の色調は、灰色もあるが、赤褐色のものがほとんどである。集安など古式の瓦に灰色のものが多いようである。

叩き文様は、縄目文、平行文、格子目文などのほか、花文などの特殊なものも比較的多く見ることができる（図 3）。集安の高句麗墳墓では、縄目文と格子目文が多いようである。叩き板には、平瓦の長さと同じくらいの長さをもつ長板もある（朝鮮総督府 1929、p.18-40）。丸瓦凸面はナデ消したものが多いようである。

丸瓦は、行基式、玉縁式ともに見られる。集安の高句麗墳墓では行基式は少なく、玉縁式が多いようである。一方、平壤遷都後には行基式が多いようである。

丸瓦は、粘土紐巻きつけと粘土板巻きつけの両者がある。丸瓦の分割は、凸面側から下→上に行われ、破面はそのままのものと面取りを行うものがある。

平瓦は桶巻き作りで、粘土板巻きつけが多く、粘土紐巻きつけもあるようである。平瓦の分割は凸面からのものが多。破面はそのままのものと、面取りを行うものがある。

D 百済の瓦

百済は、『三国史記』によれば B.C.18 年に建国され、660 年に唐・新羅連合軍に滅ぼされるまで続いた。ただ、一般的にはその建国は紀元前 1 世紀まで遡るとは考えられておらず、王城と考えられている風納土城や夢村土城の年代から、おおよそ 3 世紀中葉～後半頃に国家としての形が整い始めたと考えられている。そして、いわゆる百済瓦は、これらの王城などで初めて使用されたと考えられている。

百済瓦については、前期漢城時代（?～475 年）と中期熊津時代（475～538 年）・後期泗沘時

代（538～660年）で文様・技法などが大きく異なるため、二つに分けて説明する。

（ⅰ）漢城時代の瓦

漢城時代の瓦は、風納土城、夢村土城、石村洞4号墳のものが代表的で、その時期については未だはっきりしない部分が多いが、4世紀後半頃には使用されていたとみられている。ちなみに、風納土城・夢村土城自体の年代は3世紀後半頃からと考えられている。

以下の瓦に関する説明は、基本的に上記3遺跡の資料によっている（国立文化財研究所 2001・2002・2005、韓神大学校博物館 2003～2005、權・韓 2008、金元龍ほか 1987・1988・1989、亀田 1984 など）。

軒丸瓦 軒丸瓦は、製作技法の面から大きく2グループに分けることができ、その中が文様などで細分される。Ⅰ類は、風納土城、夢村土城、石村洞4号墳などで出土しており、基本的に瓦当裏面下半に突帯をもつグループである。Ⅱ類は、夢村土城で出土している、蓮華文が変形したと考えられる文様を飾るものである。

Ⅰ類の文様は、大きく幾何学文系（A類）、樹木文系（B類）、蓮華文系（C類）、獣面文系（D類）、素文系（E類）に分けられる。

まず幾何学文系（A類）（図4-1）は、内区中央に円形または方形の凸線または突出による中房をもち、そこから四方に先端部が十字形や樹木のような三叉状になる凸線を配して4区画し、そのなかに円文（十字や小さな方形が入る）を配するもの、その4区画の中がないものなどがある。文様としては、漢や樂浪郡などの瓦の4区画文様の系譜を引くものと考えられるが、区画の先端部がY字状に表現される例は、樂浪瓦（東京大学文学部考古学研究室 1965、図版9-6など）にある。

製作技法は、まず范型に粘土を詰め、おおよその瓦当部を作った後、粘土紐を瓦当裏面、縁よりやや内側に巻き上げて円筒状のものを作り、そののち不要な部分を切断しているようである。そのため、瓦当裏面下半の縁よりやや内側に突帯を残すものが多いが、突帯を残さないものもある。このように、丸瓦部は、内型を使用しない粘土紐巻き上げ技法（泥条盤築技法）によって作られている。瓦当部から丸瓦部にかけてよく残るものはほとんど見られなかったが、確認できたものでは、丸瓦部の内外面は基本的にナデ調整である。

樹木文系（B類）（図4-2）は、A類の幾何学文系の一部に枝状の表現や十字円文などを付加したようにも見え、基本的に同じグループに入れるべきものかもしれないが、ある程度具象的な表現を意識しているように思われるので、分けておく。また、外区外縁が突出していない。このグループの製作技法は、基本的にA類と同じと思われる。

蓮華文系（C類）は、夢村土城で以前出土したものと、風納土城の最近の発掘調査で出土したのものがある。両者は文様が全く異なり、ひとまず別グループと考えておく。

前者（図4-4）は単弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で、中央に円文があり、その外側に圈線がめぐらされている。製作技法はこれまでのものと同じようで、瓦当裏面下半に突

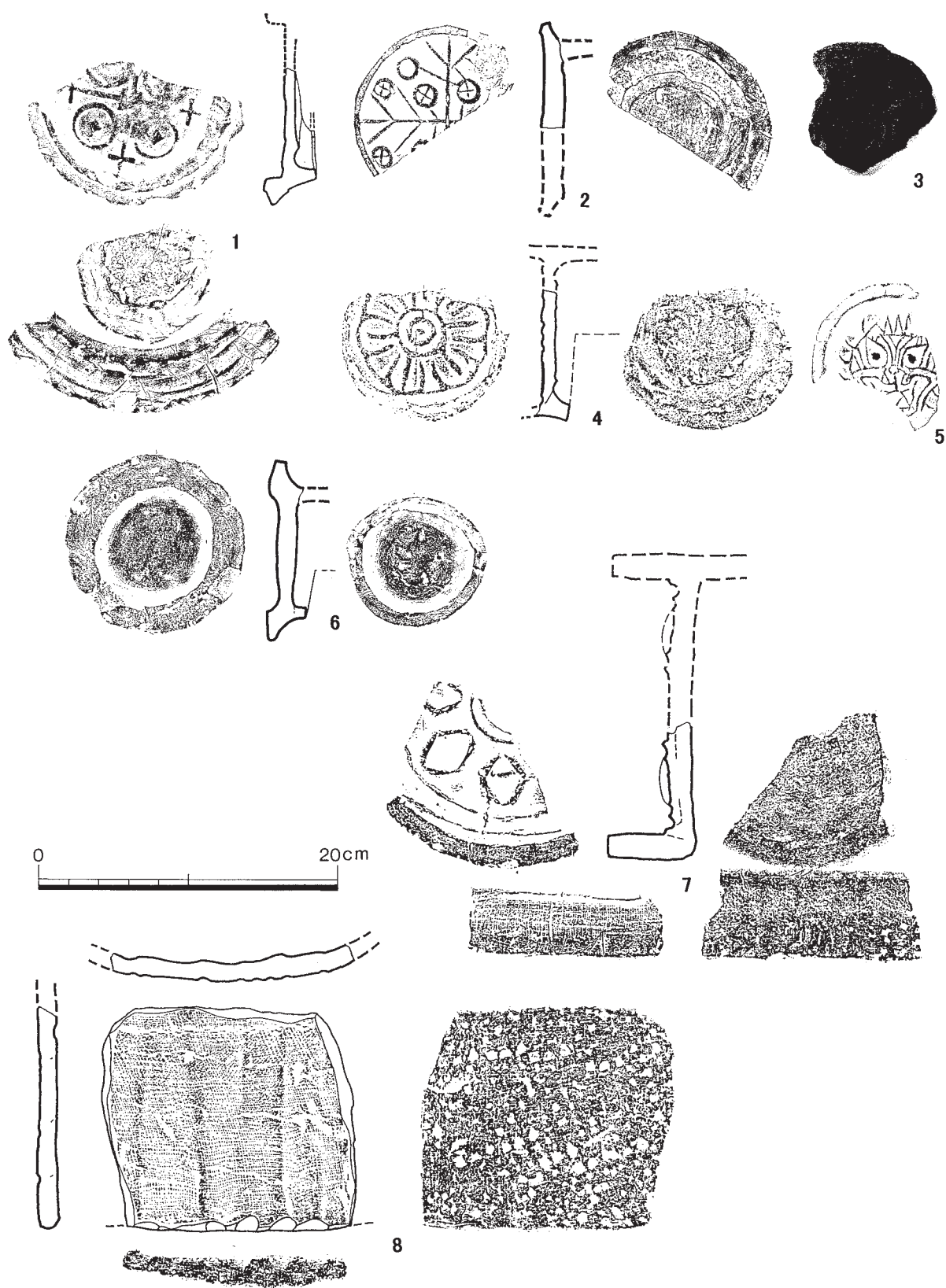


図4 百濟漢城時代の軒瓦(1/4) 1:石村洞4号墳、2・3・5・6:風納土城、4・7・8:夢村土城

帯が残っている。

後者（図4－3）は詳細が不明であるが、素弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房はやや丸く盛り上がり、2本の圈線で区画されている。蓮弁は線で縁取りされ、弁中央に凸線が入る。類似した文様は中国永寧寺などで出土しており、北魏の瓦とされている（程永建 2007、p.273 図版252）。製作技法は不明である。

獣面文系（D類）（図4－5）も最近の発掘調査で出土したもので、詳細は不明である。内区中央に、大きく口を開けた獣面文が線で表現されている。中国の南京市内で類例が出土しており、南朝系の瓦の可能性が考えられる。

確認できた一部の破片によると、製作技法は一見するとこれまでの例と同じように見えるが、丸瓦凹面に布目があり、これまでの泥条盤築技法によるものではなく、内型を使用して作った半截丸瓦を接合しているようである。

素文系（E類）（図4－6）は瓦当文様が無文のものである。基本的には、A～C類と同じように、泥条盤築技法によって丸瓦部を作っていると思われる。

以上、I類の軒丸瓦について述べてきたが、基本的に瓦当裏面下半に突帯をもつ点で形態的な類似が見られ、D類の獣面文系以外のものは、泥条盤築技法による粘土円筒の不必要な部分をあとで切り取っているようである。

丸瓦部は、後述するように直径10 cmほどで、一般的な丸瓦より小さく、厚さも1 cmほどと薄い。形態的には玉縁式であり、行基式は確認できていない。調整技法は、D類以外は泥条盤築技法によっており、内外面とも基本的にナデである。D類に関しては、凹面に布目が残っている。また瓦当部は残っていないが、丸瓦に円形の釘穴があるものがある。

以上述べてきたI類軒丸瓦の時期については明確な根拠はないものの、石村洞4号墳の共伴土器の年代が4世紀後半～5世紀初とみられており、4世紀後半を中心とする時期と考えている。また、D類の獣面文系軒丸瓦は、類例として中国南京の南朝の瓦がある。詳細は不明であるが、目や口や耳、そして髪の実現が類似したものとしては、南京市建業路朝天宮南出土例がある（賀雲翱 2005、p.23 図14－3）。この瓦は東晋早期と考えられており、4世紀前半代の可能性が考えられる。そうすると、文様は異なるが、石村洞4号墳の瓦が4世紀後半を中心とする時期とみられることと矛盾はないようである。

II類軒丸瓦（図4－7）は夢村土城のみで出土しており、これまで述べてきたI類軒丸瓦とは製作技法や大きさなどが明らかに異なる。

中房は外側の圈線のみ残り、その中の様子はわからない。内区は菱形が線で表現され、かなり崩れているが、蓮華文が簡略化したもので、八葉のようである。この瓦の特徴は外区外縁にある。内側の高さが3.9 cmときわめて高く、その内面に布目が残っている。そして、外面には一辺4～5 mmの格子目文が残る。内区と外区外縁の接合状況がよくわからないので、不確実ではあるが、内区の瓦当文様部分のみの範型に粘土を詰め込み、そのあと内型と布を使用して作

った粘土円筒を嵌め、瓦当部と密着させたのち、瓦当裏面の高さに合わせて不必要な部分を切り取った可能性が推測される。さらに、この軒丸瓦のもう一つの特徴が、復元直径 20.0 cm という大きさである。

したがって、この軒丸瓦はⅠ類軒丸瓦とは明らかに製作技法、文様などにおいて大きく異なり、別系譜のものと考えられる。集安太王陵の蓮蕾文軒丸瓦の外区外縁が、同じように内側での高さ約 4 cm ときわめて高く、文様の菱形文が蓮蕾文の簡略化とみられることから、時期については、不確実ではあるが、5 世紀前半代のものではないかと考えている。

軒平瓦 夢村土城で 1 点、軒平瓦の可能性のあるものが出土している（図 4-8）。端面の上下を指で押さえたものである。オサエはやや弱い、漢城時代の平瓦にこのような例がないことから、集安高句麗墳墓に見られる軒平瓦（？）と関わる可能性も考えておきたい。凹面には模骨の枰板痕跡と布目、凸面には格子目文の叩き文様が見られる。粘土紐作りである。時期についてはよくわからない。

その他 丸瓦は、泥条盤築技法によるものと、内型を使用したものがある。玉縁式はあるが、行基式は確認していない。玉縁式丸瓦は、ナデなどにより段をつけて玉縁状にしたもの、凸線で玉縁部を区分したもの、明確な段を作った玉縁部をもつものがある。日本で一般的に見られるような、明確な段をもつ玉縁式丸瓦は、風納土城では確認できたが、夢村土城や石村洞 4 号墳の資料の中には確認できなかった。

素材については、粘土紐と粘土板ともに確認した。粘土板の例は、合わせ目とともに、粘土板切り離し時の糸切り痕を確認している。ただ、体部は粘土板であるが、玉縁部のみ粘土紐を巻き上げたような痕跡をもつものもある。分割は、凸面側からなされたものを確認した。基本的に面取りを行っている。

丸瓦の直径は約 10 cm で、厚さは基本的に 1 cm ほどのものがほとんどである。これらは、前述のⅠ類軒丸瓦と組むもので、熊津・泗泚時代や日本の瓦に比べるとかなり小さく、薄手の感がある。

ただ、一部に、おそらく夢村土城出土のⅡ類軒丸瓦などに関わるものと推測される、直径がより大きな一群もある。これは直径が 17 cm ほどあり、凸面に縄目文を残すものとナデ消したものがある。凹面は布目である。厚さは 0.8～1.3 cm である。

丸瓦の叩き文様は、泥条盤築技法によるものは基本的にナデで確認できないが、凹面に布目を残すものでは縄目文と格子目文が見られる（図 5-5・6）。

平瓦は、泥条盤築技法によるものと枰板連結模骨を内型にしたものがあり、素材は枰板連結模骨を使用したものも粘土紐と粘土板の両方がある。粘土板のものでは、粘土板切り離し痕跡を残すものがある（図 5-10）。枰板の幅は、のちの熊津・泗泚時代のものにくらべて比較的広く、5～8 cm ほどのものが多く見られる。分割は、凹面側からのものと凸面側からのものを確認している。基本的に面取りをしているが、部分的に破面を残すものがある。端面はヘラケズ

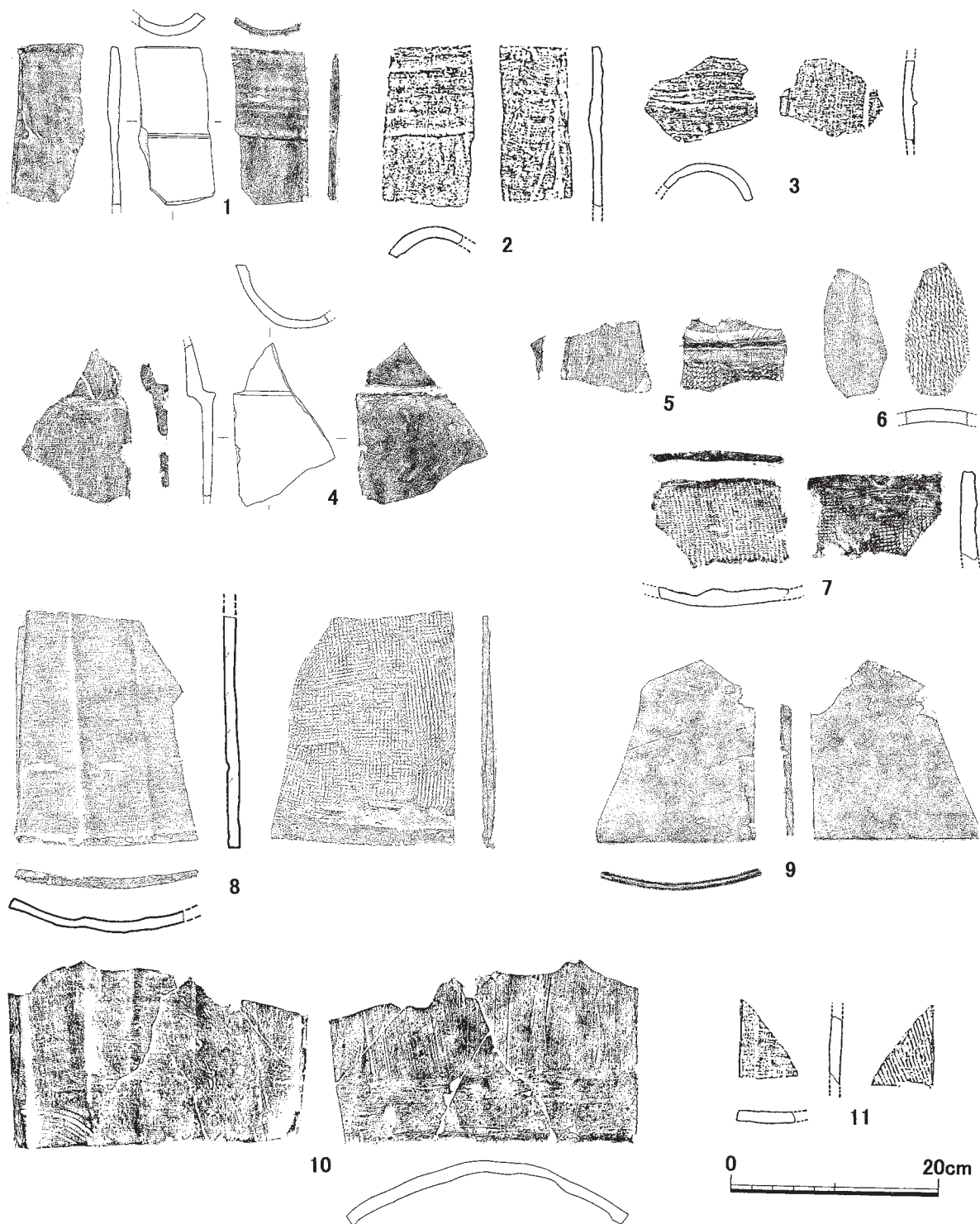


図5 百濟漢城時代の丸瓦・平瓦(1/6) 1・4～6・8～10:風納土城、2・3・7・11:石村洞4号墳

リを行わず、ナデのままのものが多く見られる。

叩き文様は大多数が格子文で、一部に平行文や縄目文がある。石村洞4号墳では縄目文は確認していない。格子文は正格子文、斜格子文があり、基本的に格子の大きさは小さく、その時代の土器の叩き文様と類似したものもある。なお、同じ瓦に格子文と縄目文が確認できるものがある。凹面の端部側に無文の当て具の痕跡を残すものもある。また、凹面側に縄目文を残すもの(図5-7)も一部見られる。これには、百濟南部地域の凹面縄蓆文瓦のようなヨコ方向の紐の痕跡が見られず、泥条盤築技法の時の内面の当て具(細長い板か棒状のものに縄を巻いたもの?)の痕跡かと思われる。

(ii) 熊津・泗沘時代の瓦

前述のように、瓦の様相は、前期漢城時代と中期熊津時代以降ではかなり異なる。ここでは中期熊津時代と後期泗沘時代のものをまとめた。べる。

この時期の瓦に関しては、朴容埴の一連の研究(1976 ほか)が基礎となっており、その後、亀田(1981)、金誠龜(1992)などの研究があり、近年では清水昭博(2003 など)が精力的に研究を進めている。基礎的な資料としては、忠南大学校百濟研究所編『百濟瓦塼図譜』(1972)、井内古文化研究室編『朝鮮瓦塼図譜 III 百濟・新羅1』(1978)、(財)百濟文化開発研究院『百濟瓦塼図録』(1983)があり、1980年代以降は各遺跡の報告書が刊行されている。

瓦は公州、扶余、益山などの王都の宮殿や寺院で出土するほか、地方の山城でも出土している。ただ、高句麗や前期漢城時代などのように古墳に葺かれたものは確認されていない。

瓦の種類としては、軒丸瓦、軒平瓦、鳥衾瓦、丸瓦、平瓦、鴟尾、蓮華文鬼板などがある。

軒丸瓦 軒丸瓦の瓦当文様は蓮華文が中心であり、ほかに卍字文、素文などがある。蓮華文は素弁(無子葉単弁)がほとんどで、単弁(単子葉単弁)、複弁、忍冬蓮華文などもある。素弁は全くの素弁がほとんどであるが、有稜もある。

素弁は6種に細分できる。A.尖形、B.反転突起形(点珠形を含む)、C.三角反転形、D.切り込み反転形、E.湾曲反転形、F.円端形である。これらが6~7世紀に展開するが、現時点では、公州大通寺跡で出土しているBの反転突起形の蓮華文軒丸瓦が6世紀前半まで遡る可能性が高く、最も古いと考えている。中房は凸形がほとんどであるが、圈線で囲むものもある。蓮子は1+4、1+6、1+8がほとんどだが、中央の1個のまわりに蓮子を二重にめぐらすもの(1+○+○)もある。外区外縁は基本的に素文であるが、珠文をめぐらすものもある。

製作技法に関しては、薛貞蓮の研究(1976)が初期の例で、亀田も1981年の論文で瓦当面と丸瓦の接合に関して簡単に整理し、丸瓦先端部に2回ケズリを行う手法(片柄状^{かたぼぞ}2回ケズリ)が日本へ伝えられたことを述べ、技法面での百濟瓦と日本の瓦の関係を指摘した(亀田1981)。近年では、戸田有二が精力的に研究を進めている(戸田2001、2004)。また、菱田哲郎が日本の飛鳥寺などの初期の瓦を整理し、その成果が逆に、百濟瓦を研究するうえで参考になっている(菱田1986)。

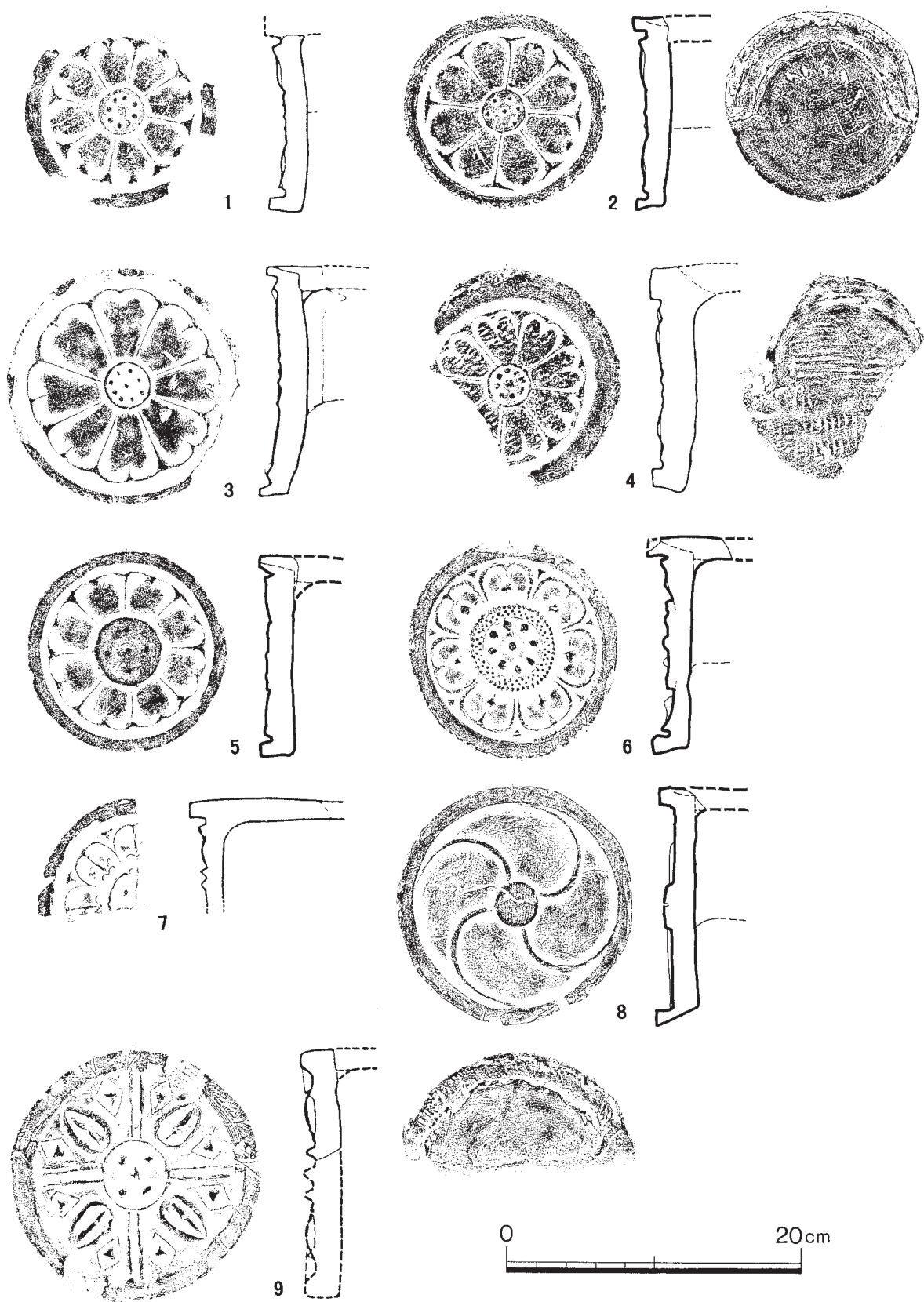


図6 百濟熊津・泗沘時代の軒丸瓦(1/4)

1・5:軍守里寺跡、2:大通寺跡、3:扶蘇山城、4:佳増里寺跡、6:県北里窯跡、7:帝釈寺跡、
8:公山城、9:双北里寺跡

範型に関しては、基本的には瓦当側面にかぶらないものを使用している。ただ一部、側面にかぶるものを使用した可能性があるものが扶余龍井里寺跡例に存在するようだが、さらなる検討が必要である。

また、垂木先瓦ではあるが、顎面に鋸歯文と珠文を飾る益山弥勒寺跡の資料があるので、枷型の使用はあるようである。ただし、普通の軒丸瓦では未確認である。

丸瓦先端部の加工と先端無加工の丸瓦の接合位置については、丸瓦の凹面側を片柄状に段をつけて2回ケズリし、瓦当裏面最上部に接合するもの(図6-3)が最も多く、無加工、1回ケズリも比較的多く見られる。

飛鳥瓦で整理されているような瓦当文様と製作技法の関係は、百済瓦全体ではうまく対応していない。しかし、細かくみると、旧衙里寺跡では弁端点珠が多く、片柄状2回ケズリのものが比較的多い。飛鳥寺の星組の瓦工人が、旧衙里寺跡に関わる瓦工人グループの人たちであった可能性は考えられる。

また、片柄状2回ケズリの手法は、これまで筆者が確認した範囲では、高句麗にはないようである。一方、中国の瓦にも、筆者が確認した範囲では存在しないようである。百済で自生したのであろうか。しかし、熊津時代から泗泚時代の百済瓦塼の文様などをみると、中国に片柄状2回ケズリの手法がある可能性が高そうである。

この片柄状2回ケズリの手法は、丸瓦先端部加工の方法としては特異であり、技法面から百済瓦の影響を確認するときに有効である。日本の飛鳥瓦と同じように、新羅瓦にも見られる。7世紀末に造営された雁鴨池出土瓦には、百済軒丸瓦の文様とよく似たものがあり、そのなかに片柄状2回ケズリの丸瓦が接合された例を確認している。技法面からも、新羅瓦に百済瓦の影響が及んだことが判明するのである。

接合用のキズについては、瓦当上部や上面にキズをつけたものと、丸瓦広端面やその付近にキズをつけたものがあり、瓦当上部や丸瓦広端面にキズをいれるものは、扶余地域では龍井里寺跡、金剛寺跡などで比較的多くみられ、工人グループに特徴があるようである。キズはヘラでつけたものが多いが、金剛寺跡例には瓦当裏面上半部に三角形の大きな切り込みを多数入れたものもある。また、逆に丸瓦の先端部を歯車のようにギザギザに加工して、それを瓦当裏面上部に押しつけたものもある。

瓦当裏面の調整は、指などやわらかいものによるオサエとナデ、工具を利用したナデ、回転を利用した回転ナデ(図6-2)、そしてヘラケズリと叩きなどがある。

瓦当裏面の叩きは、百済ではあまり見られないが、佳増里寺跡(図6-4)や扶蘇山城に例がある。前者は裏面を平行叩きしているが、瓦当面にも縄目文が残っている。後者は平行叩きのあと、ナデている。一方、古新羅瓦にも瓦当裏面の叩きは比較的多く見られる。

当時の百済と新羅の関係を勘案すると、百済→新羅と考えられるが、瓦当裏面叩きの瓦は古新羅瓦では比較的多く見られるので、その逆に古新羅瓦→百済瓦も考えておいた方がよいかも

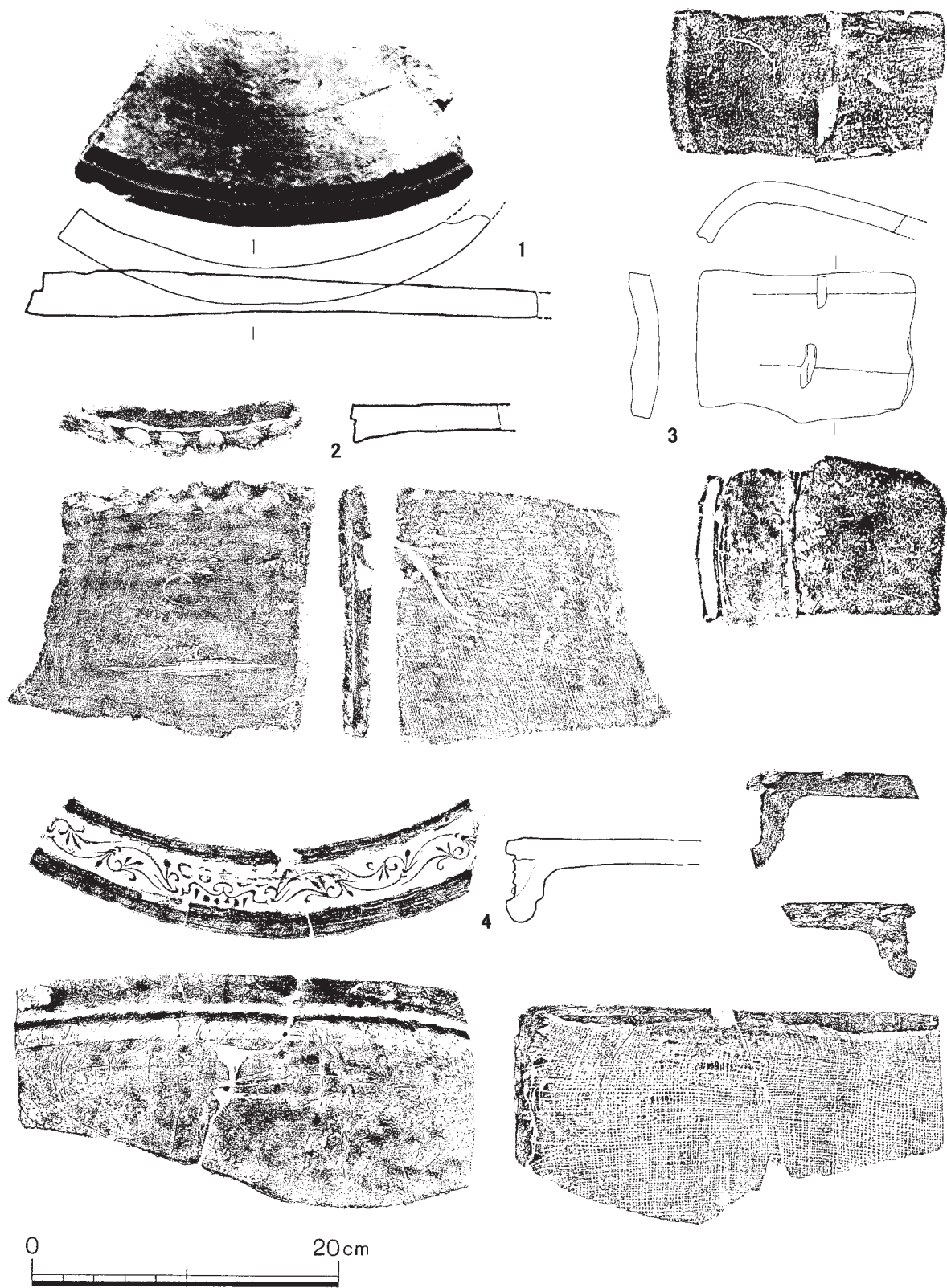


図7 百濟泗泚時代の軒平瓦 (1/4) 1:旧衙里寺跡、2:軍守里寺跡、3:扶蘇山城、4:帝釈寺跡

しれない。また、日本の瓦でもときどき見ることができるが、近江の軒丸瓦の瓦当裏面の叩きは、瓦当文様も考慮すると、新羅から伝えられた可能性も考えられる。

軒平瓦 百済では、軒平瓦はほとんど発見されていない。わずかにその例として挙げられるのは、旧衙里寺跡（図7-1）や陵寺（図8-2）で出土している、厚くなった瓦当面の上半分を1cmほど切り取って段差を作った有段軒平瓦、軍守里寺跡で出土している、下顎に指頭圧痕をもつ重弧文軒平瓦（押圧波状重弧文軒平瓦）（図7-2）、益山帝釈寺跡で出土している、范型使用の中央に獣面文を飾る忍冬唐草文軒平瓦（図7-4）、そして扶蘇山城で出土している、土器の口縁部状の形態をした土器口縁状軒平瓦（図7-3）である。

旧衙里寺跡や陵寺例のような有段軒平瓦は、百済ではほかに確認していないが、新羅の皇龍寺跡（崔孟植 2006、pp.280・281 図面 75・76）、多慶窯跡群などに見られる。

軍守里寺跡例のような指頭圧痕をもつ重弧文軒平瓦も百済ではほかに類例がなく、顎部の指頭圧痕は高句麗の太王陵などのものと類似する。ただ、高句麗瓦には重弧文はないようである。一方、中国の北魏永寧寺で、基本的に同じ文様の重弧文軒平瓦が見られる（奈良国立文化財研究所 1998、p.129 図 91-1~5）。この重弧文軒平瓦の叩き文様は不明だが、一緒に報告されている平瓦の叩き文様は縄目文である。関係があるかどうかはわからないが、軍守里寺跡重弧文軒平瓦の叩き文様は、百済瓦では珍しい縄目文である。

益山帝釈寺跡例は范型を使用した軒平瓦で、范型の端は凹面側で8mmほどかぶっている。顎は薄く、丸くなっている。平瓦部は布目痕跡が瓦当面近くまで確認でき、その端面も含めて瓦当面となっていることから、范型の凹面側にまだ軟らかめの平瓦を押しつけ、凸面側に瓦当面・顎部となる粘土を貼り付けて文様を写しているようである。

このような軒平瓦は百済にはなく、高句麗・新羅でも見ることはできない。また、統一新羅時代に一般的な、顎をもつ軒平瓦は、瓦当裏面の上部に段や溝などを彫って平瓦を接合しており、製作技法も異なる。ただ、平瓦の凹面には布目が残るものの、模骨の枠板痕跡はないようであり、後述する新羅の円筒桶による平瓦と共通する。

このような、中心飾りに獣面文状の文様を使用した均整唐草文軒平瓦はきわめて珍しく、その近似例はほとんど挙げることができない。ただ、近年、中国南朝の瓦の中に獣面文を飾るものが確認されており（賀雲翱 2005）、これらとの関係も推測される。一方、日本の資料であるが、紀伊上野廃寺により近いものがある。その時期は、組み合う軒丸瓦も含めて、7世紀末ころと考えられている。この帝釈寺跡の軒平瓦とセットをなすと考えられる軒丸瓦は、素弁蓮華文軒丸瓦か忍冬蓮華文軒丸瓦（図6-7）であり、7世紀代の軒平瓦で、中国南朝から伝えられたものと考えておきたい。

そしてもう一つが、扶蘇山城で出土している、土器の口縁部の形をしたものである。一見すると土器の破片かと思われるものだが、凹面には模骨の枠板痕跡と布目が残っており、粘土板か粘土紐かは確認できていないが、模骨に粘土を貼り付け、模骨の外側にはみ出した部分を土

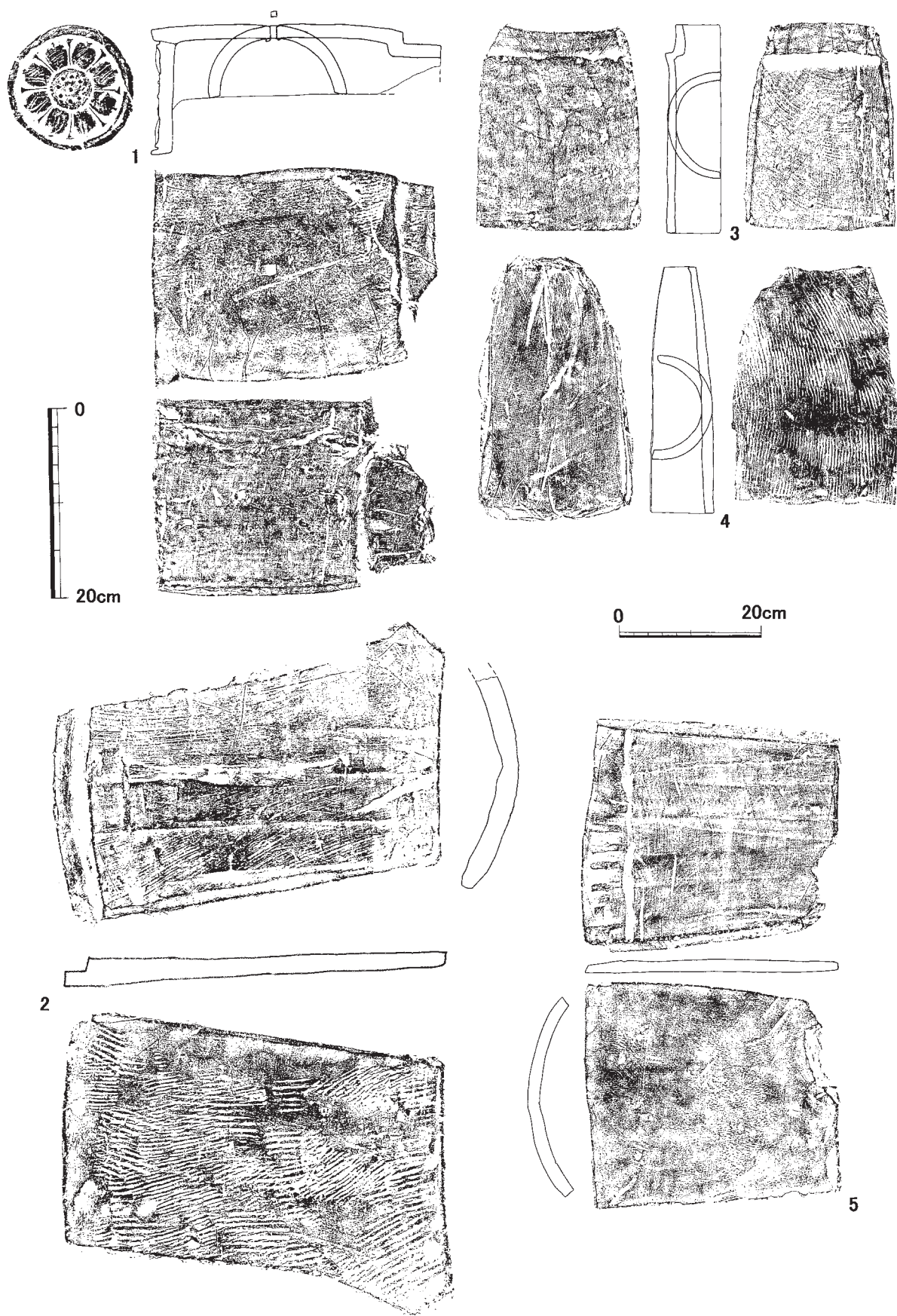


図8 百濟泗泚時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦(1・2:1/6、3~5:1/8) 1~5:陵寺

器の口縁部状に外反させて作っているようである。このような土器口縁状軒平瓦は、百済ではこの扶蘇山城例以外に確認していないが、新羅の月城と勿川里 C-1-2-3 号窯跡でも出土しており、このような形の軒平瓦が百済と新羅にあることがわかる。ただ、新羅の例は凹面に布目や模骨の杵板痕跡は確認できない。

以上、百済の軒平瓦を概観したが、旧衙里寺跡と陵寺の有段軒平瓦は、重弧文軒平瓦と同様の意図で作られたものと考えられる。軍守里寺跡の指頭圧痕をもつ重弧文軒平瓦は、中国や高句麗などで類例を見ることができ、日本では 7 世紀後半に見られる。帝釈寺跡例は忍冬唐草文を飾っており、同じ帝釈寺跡で出土している忍冬蓮華文軒丸瓦とセットをなす可能性が高い。そして扶蘇山城の土器口縁状軒平瓦も含め、いずれも百済内ではほかの遺跡での確認例がない。今後の資料の増加を待ちたいが、おそらく 7 世紀に入り、これらの遺跡においてどこかからの影響を受け入れ、独自に軒平瓦が使用されたものと考えておきたい。また、そのほかに、平瓦の先端部を厚くしただけの素文の例もあるかもしれない。

その他 丸瓦・平瓦の叩き文様はすり消したものが多いが、平行文が多いようである。格子目文、縄目文もある。叩き板は、短板や中板はあるが、長板はないようである（図 8）。

丸瓦は、行基式と玉縁式の両方とも見られる。丸瓦は、粘土板巻きつけ例はある。粘土紐巻きつけは不明。丸瓦の分割は凸面からで、破面はそのままのものもあるが、多くは面取りを行う。玉縁部凹面の布目は、あるものとなないものの両者がある。

平瓦は、粘土板桶巻き作りが見られる。粘土紐巻きつけは不明。平瓦の分割は凹面からで、破面はそのままのものと面取りを行ったものがある。

丸瓦・平瓦ともに、漢城時代に見られた泥条盤築技法のものは確認できていない。

（iii）地方の瓦

百済の熊津・泗沘時代には、当時の都であった公州や扶余、そして都に準ずる地であった益山などでは基本的に見られない瓦が、かつての百済・新羅国境付近に存在する。

軒丸瓦としては、やや不確実であるが、大田広域市鶏足山城に図 9-1 のような素弁八葉蓮華文軒丸瓦が見られる（大田産業大学郷土文化研究所 1994）。蓮華文自体は百済瓦とみることもできるが、百済滅亡後のソウル地域の清潭洞遺跡出土例と比較的類似している。ただ、瓦当裏面に布目が残し、これは布目押圧技法（毛利光 1991）によるものと判断され、現時点では朝鮮半島では類例を捜しえていない。

次に、図 9-3～5 は大田広域市月坪洞遺跡出土の丸瓦・平瓦である（国立公州博物館 1999）。これらの瓦は、杵板連結模骨などの内型に布を巻き、その上に粘土紐・板を巻きつけたものではなく、布の代わりに簾状のものを巻きつけて作った瓦である。内型が存在するのか、それとも内型がなく、簾状のものの内側に何らかの輪状のものをはめて固定したのかは現時点ではよくわからないが、いずれにせよ、一般的な布の代わりに、葦のようなものを横紐で綴じた簾状の模骨を使用しているのである。このような瓦を、筆者はスダレ（簾）状模骨瓦と呼んでいるが、

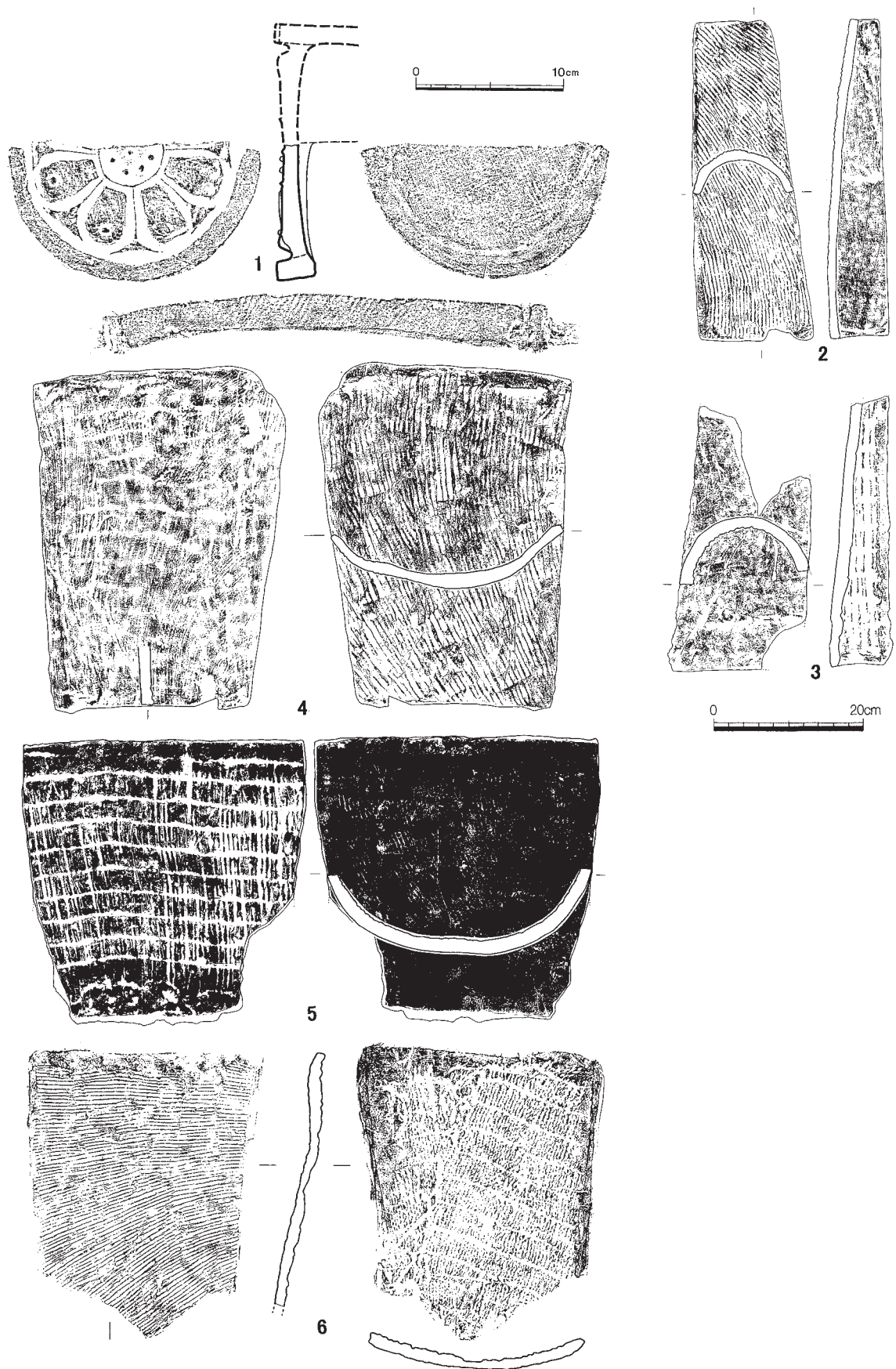


図9 百済の地方の瓦(1:1/4、2~6:1/8)

1:鶏足山城、2~5:月坪洞遺跡、6:光陽龍江里遺跡

これにはさらに布を併用したもの（図9-4）と、布を使用しないもの（図9-3・5）が、丸瓦・平瓦ともにある（亀田 2002・2006）。

現時点では、このようなスダレ（簾）状模骨瓦は、百済と新羅の国境地域であった大田広域市の2遺跡でしか確認できていないため、ひとまず百済の地方の瓦と考えている。これらの年代に関してはよくわからないが、月坪洞遺跡では遺構の重複関係などから7世紀代のものと考えられており、鶏足山城の例は、共伴する可能性がある前述の瓦当裏面布目軒丸瓦が7世紀前半ころとみられることから、ひとまず7世紀前半ころにはこのようなスダレ（簾）状模骨瓦が作られていたと考えておきたい。

そして、このスダレ（簾）状模骨瓦の技法が日本へ伝えられ、竹状模骨瓦として近畿地方や北部九州などで展開した可能性を考えている。

次に、図9-6の凹面縄蓆文瓦である。この瓦については崔孟植がまとめており、都でも一部出土はするが、明らかに少なく、百済の国境地域の瓦であることを述べている（崔孟植 1999a・2006）。いま述べたスダレ（簾）状模骨瓦と基本的には同様のものであるが、葦のような細い棒状のものではなく、縄を横紐で綴じたものを内型に巻いているようである。図示した例は、まさにその巻き付けて重なった部分が確認できるものである。縄の太さは2～7mmほどで、2～6cm間隔に綴じ紐（縄）で綴じている。平瓦が多いが、丸瓦もある。

なお、楽浪瓦や漢城時代の瓦に見られた凹面の縄目文は、綴じ紐が確認できず、この凹面縄蓆文瓦とは異なる。

この凹面縄蓆文瓦の時期もよくわからないが、前述の鶏足山城や月坪洞遺跡で出土しており、そのほかの出土遺跡も勘案して、6世紀後半まで遡る可能性を含めつつ、7世紀前半を中心とする年代を想定しておきたい。

凹面縄蓆文瓦の起源については、筆者は確認できていないが、高句麗の南部地域にあるようであり、その技術が百済・新羅の国境地域へ伝えられたらしい（沈光注ほか 1999）。

E 新羅の瓦

新羅は、『三国史記』によれば B.C.57 年に建国され、668 年に百済・高句麗を滅ぼして三国を統一したのち、935 年まで続いた。都は移動せず、一貫して慶尚北道慶州市にあった。

新羅の瓦の始まりに関しては、よくわかっていない。新羅における仏教公認は法興王 14 年（527）で、その年に興輪寺が造り始められるが、崇仏廃仏をめぐる議論をへて、同 22 年（535）に工事が再開され、真興王 5 年（544）に完工したと考えられている。この興輪寺跡については本格的な発掘調査がなされていないため、創建時の瓦などはわかっていない。

一方、仏教公認以前にも新羅に仏教は伝えられていたことは『三国遺事』などに記されており、5世紀末の炤知王代に「内殿」に修行僧がいたことが見える（『三国遺事』巻1、射琴匣条）。ただし、このような施設に瓦が葺かれていたかどうかは不明で、当然その可能性も残るが、現

時点では、詳細は不明ながら、前述の興輪寺が最も古い瓦葺寺院であった可能性が高い。

記録にその名前があつて所在が確認でき、かつ発掘調査がなされてその様子がわかる最古の寺院は、真興王 14 年（553）に造営が始められた皇龍寺である。つまり、現時点で知られる確実な新羅瓦は 6 世紀中葉頃からである。ただ、6 世紀前半代には本格的な瓦葺建物が造営され始めたものと考えている。

そして、新羅瓦は寺院・宮殿・山城（一部古墳で再利用？）などで使用されるようになり、かなりの量が生産されるが、668 年の三国統一から 674 年の雁鴨池造営、679 年の四天王寺造営などを境に、文様・製作技法などが大きく変化する。

そのため、瓦自体の境界は必ずしも明確ではないが、以下、古新羅時代の瓦と統一新羅時代の瓦に分けて説明していきたい。

基礎的な資料としては、『朝鮮瓦塼図譜 III 百済・新羅 1』（井内古文化研究室編 1978）、『同 IV 新羅 2』（同 1977a）、『同 V 新羅 3』（同 1977b）、『新羅瓦塼』（国立慶州博物館 2000）などがあり、近年では報告書が刊行され、それらに詳細な図面や図版が掲載されている。

（i）古新羅時代の瓦

古新羅時代の瓦としては、軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾、蓮華文鬼板、丸瓦、平瓦などがある。

軒丸瓦 軒丸瓦の瓦当文様は素弁蓮華文がほとんどであるが、複弁蓮華文もある。素弁蓮華文は、全くの素弁と有稜（有軸も含む）のものがある。

全くの素弁のものは、基本的に百済瓦の細分案にあてはめることができる。この中には、高句麗の蓮蕾文のようにボリュームがあり、弁端が尖ったものもある。百済系瓦、高句麗系瓦、そしてそれらを消化した古新羅瓦に分けられる。ただ、最近明らかになってきた中国南朝の瓦の影響を受けたものもありそうである（井内 2002、清水 2008）。

有稜のものは、闊弁と狭弁に大きく二分され、闊弁のものでは六弁が目立つ。中房は凸形が多く、蓮子は 1+〇が多い。外区外縁は素文がほとんどだが、珠文をめぐらすものもあるようである。

製作技法に関しては、尹根一の『統一新羅時代瓦当の製作技法に関する研究』（1978）が新羅瓦に関する初期のもので、その後は報告書などで分類案が示され、それぞれ説明される例が多いようである。

基本的には、半截した丸瓦を瓦当上部にのせるか、または瓦当裏面上部に接合するのであるが、泥条盤築技法によるもの、粘土円筒接着技法によるもの、瓦当嵌め込み技法によるもの、そして一見すると成形台一本造り技法のように、瓦当裏面から顎部にかけて一連の布目痕跡が見られるものがある。

泥条盤築技法のものは、勿川里窯跡群 C-1 地区出土の素弁八葉蓮華文軒丸瓦（図 10-4）である。弁端にやや大粒の珠文を飾るもので、百済瓦の影響下にこの文様が作られたのであれば、7 世紀代のものと推測される。ただ、共伴する新羅土器は、多少幅があるが、6 世紀後半

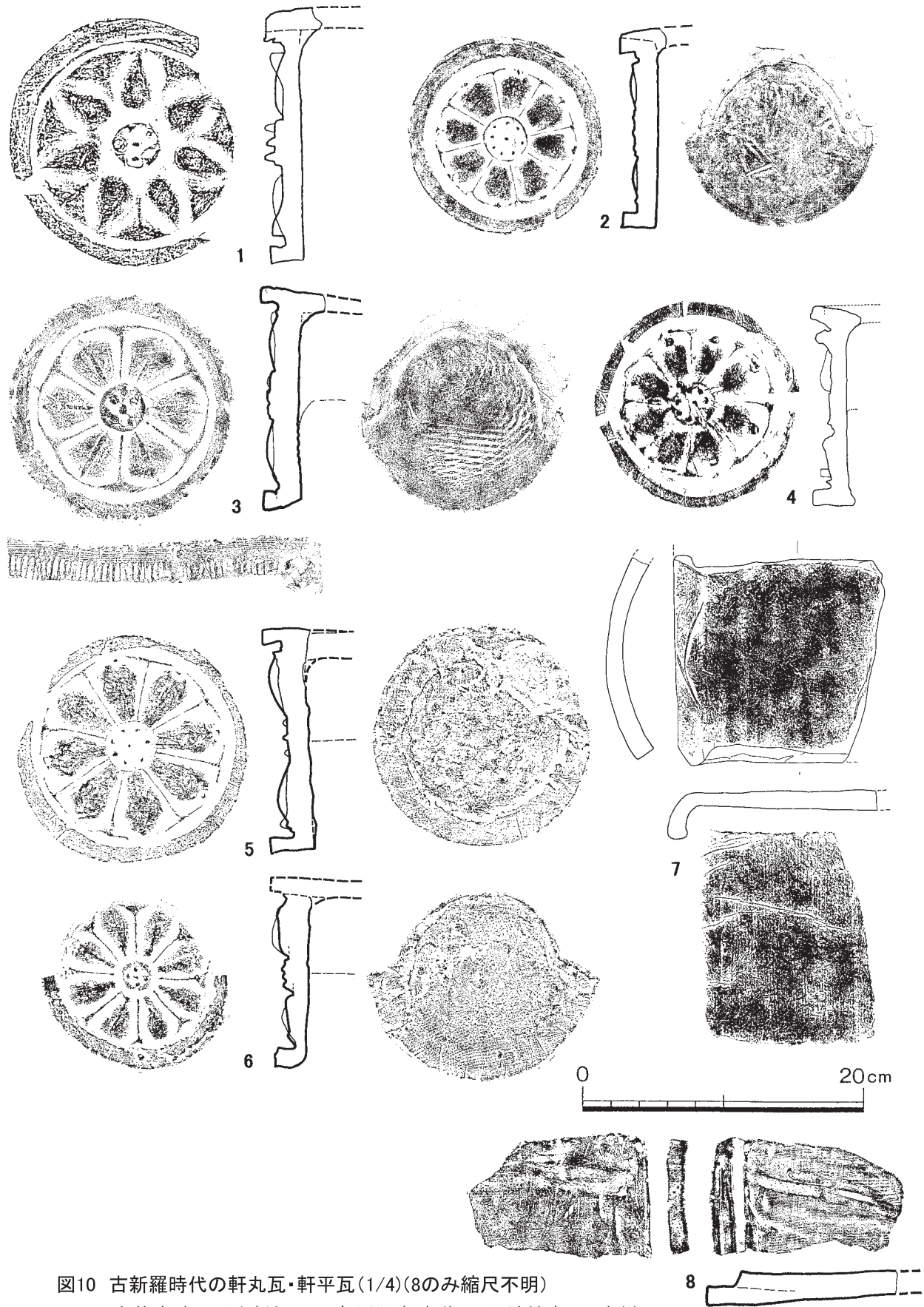


図10 古新羅時代の軒丸瓦・軒平瓦(1/4)(8のみ縮尺不明)

1・3・8: 皇龍寺跡、2: 雁鴨池、4・7: 勿川里窯跡群、5: 月城塚字、6: 慶州

～7世紀前半のものである。これに伴う丸瓦・平瓦は、基本的に凸面・凹面ともにナデである。この時期に、新羅においても泥条盤築技法の瓦が存在することがわかる。

粘土円筒接着技法のものは、月城塚字出土の素弁八葉蓮華文軒丸瓦（図10－5）である。この瓦の瓦当裏面には、粘土円筒を半截したときに残る下半部の突帯が、わずかながら明瞭に残っており、この方法で作られたことがわかる。ただ、図示したものは、粘土円筒を接合する前に布で瓦当裏面が押さえられたらしく、布目痕跡が残っている。粘土円筒の切断はヘラでなされたようで、その痕跡が見られる。また、同じように粘土円筒を貼り付けたと考えられるものをもう1点確認しているが、それには布目が見られない。布を使うものと使わないものの両方があるようである。

瓦当嵌め込み技法によるものは、慶州の北約20kmの六通里窯跡で出土している素弁蓮華文軒丸瓦である。外区外縁がすべてはずれ、内区のみで、瓦当側面にところどころ布目痕跡を見ることができる。時期は6世紀後半頃と推測される。

瓦当裏面から顎部にかけて一連の布目痕跡が見られるもの（図10－6）は、出土地が慶州とされているだけで、詳細は不明である。ただ、比較的ボリュームのある素弁八葉蓮華文軒丸瓦は、古新羅時代の瓦として問題ないと思われる。このように瓦当裏面から顎面にかけて一連の布目が残る瓦は、これまで朝鮮半島の瓦では見たことがない。この瓦は上部が欠け、そこが石膏で復元されているため、詳細は不明だが、日本で見られる成形台一本造り技法ではなく、そのような型で作られた瓦当部に、半截された丸瓦を接合しているようである。いずれにせよ、きわめて珍しいものである。

これら4種の製作技法以外の、一般的な丸瓦を接合するものに関しては、基本的に百済瓦で述べた接合技法と同じ方法を使用している。樂浪郡や高句麗の瓦にはなく、百済瓦にのみ見られた、片柄状2回ケズリで丸瓦先端部を加工した丸瓦を接合する軒丸瓦は、雁鴨池例（図10－2）などのように、百済軒丸瓦と文様がきわめて類似しており、百済の工人が新羅に来て作ったか、指導したことがわかる。また、この文様・技法のものは、瓦当裏面を回転ナデしている例が多く、こうした点においても百済とのつながりがよくわかる。

この一般的な接合技法の軒丸瓦の文様は、先ほど述べたように、高句麗系、百済系、そしてそれらの影響下に成立した古新羅瓦に区分できると考えているが、初期の高句麗系瓦と考えられている皇龍寺跡例（図10－1）は、瓦当上部に丸瓦をかぶせるようにしており、平壤などで見られる高句麗瓦とは製作技法が異なるように思われる。高句麗にもこのような接合技法の軒丸瓦があるのであろうか。

また、古新羅瓦の特徴として、瓦当裏面を叩いているものが比較的多く見られる（図10－3）。その叩き文様は平行文が多いようだが、やや大きめの斜格子（菱形）文のものもある。

軒平瓦 古新羅時代の軒平瓦に関しては、これまであまりわかっていなかったが、近年の発掘調査などで多少確認されてきた。大きく2種に分けることができる。

一つは、百済の旧衙里寺跡・陵寺で出土しているような、瓦当部がやや厚くなり、その上部をヘラでカギの手状に削った有段軒平瓦である。皇龍寺跡（図 10-8）と多慶窯跡（国立慶州博物館 2000、p.190 図版 606）で出土している。多慶窯跡では古新羅時代から統一新羅時代初期の瓦が出土しており、これらの軒平瓦が確実に古新羅時代のものかはわからないが、その可能性はあると考えている。

皇龍寺跡例は、凹面に模骨の杵板と布目の痕跡を残している。多慶窯跡例は、凹面の布目は確認できるが、杵板痕跡は確認できない。凸面は基本的にナデ消されているが、一部、格子目の叩き文様が残っている。また、六通里窯跡に同様の段を有する平瓦があるが（国立慶州博物館 2000、p.186 図版 590-1）、段の部分が小さく、有段軒平瓦であるのか、平瓦で段を有するものなのか、よくわからない。

もう一つが、百済の扶蘇山城で出土しているものと類似した、土器口縁状軒平瓦である。ただ、扶蘇山城例は凹面に模骨と布目の痕跡が残るが、新羅の月城塚字（国立慶州博物館 2000、pp.32-33 図版 61-62）と勿川里 C-1-2-3 号窯跡（図 10-7）で出土しているものの凹面には模骨や布目の痕跡がなく、ナデである。なお、勿川里 C-1-2-3 号窯跡で共伴する土器（図 12-3 ~ 7）は 6 世紀後半～7 世紀前半のものである。

これら以外の、一般的な範型を使用した軒平瓦は、現時点では古新羅時代のものは確認されていない。また、高句麗太王陵や百済軍守里寺跡にみられるような、顎面に指押さえをしたものも確認されていない。

ただ、慶州から北西約 180km の忠清北道忠州塔坪里遺跡では、無文の顎部をもつ軒平瓦が出土している（金有植 2004）。また、その遺跡では、時期はよくわからないが、古式の唐草文軒平瓦も出土している（山崎 2007）。古新羅時代まで遡る可能性はあるように思われる。

以上のように、古新羅時代の軒平瓦については、百済と同じような有段軒平瓦、土器口縁状軒平瓦、そして都からかなり離れた地方に無文軒平瓦はあるが、現時点では範型を使用した軒平瓦は確認できていない。

（ii）統一新羅時代の瓦

軒丸瓦 統一新羅時代の軒丸瓦は、蓮華文を中心にして宝相華文、忍冬文などの植物系文様と鳥文、迦陵頻迦文などの動物系文様がある。文様構成としては、内区の内側と外側に蓮華文や宝相華文などをあわせ表現する、複合花文が多く見られる。また、軒丸瓦の外区に、密な珠文や唐草文をめぐらすものが見られ、外区外縁の珠文を線でつなぐものもある。

軒丸瓦の中房は、単に蓮子を 1 + ○などのように配するもの以外に、その中を輻線や圏線で区切ったり、蓮子のかわりに蓮弁を配したりするものがある。輻線や圏線で区切るものは、高句麗瓦に類例がある。中房の周囲にしべ薬をめぐらすものも多く見られるが、これは百済瓦埴に類例がある。また、顎部に唐草文などの文様が飾られることがある。顎の幅は、基本的に瓦当部の厚さと同じであり、狭い。このような顎面に文様を飾る例は、百済の益山弥勒寺跡の緑釉垂

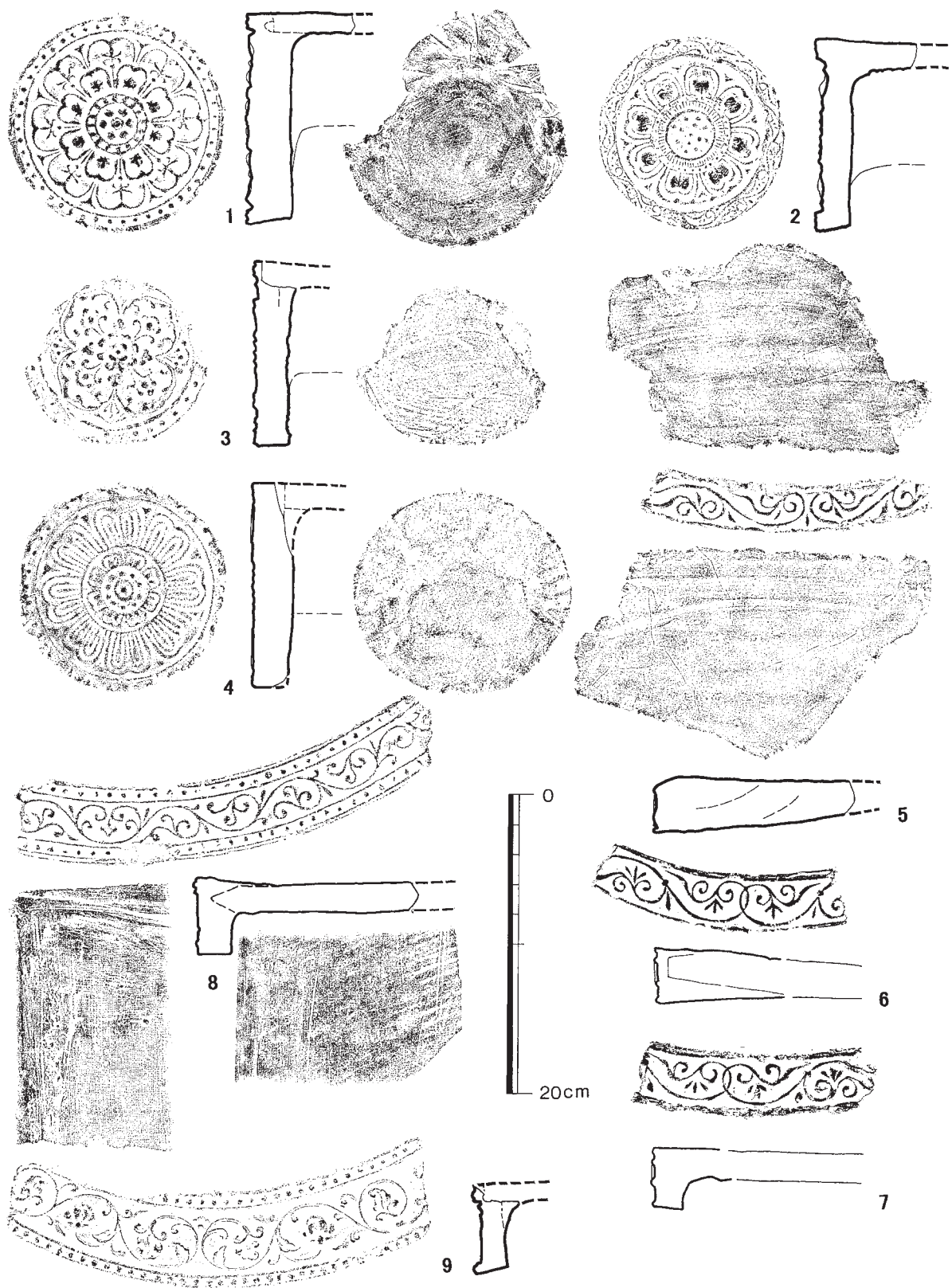


図11 統一新羅時代の軒丸瓦・軒平瓦(1/4)

1・3・5:雁鴨池、2:靈廟寺跡、4:鬼橋、6・7:新羅王京、8:皇龍寺跡、9:仁旺里寺跡

木先瓦に見られる。

製作技法に関しては、瓦当裏面上部に段や溝状のものを作り、そこに丸瓦を接合するのが基本である。このとき、丸瓦の先端部などにヘラなどによるキズを入れ、接合するものが比較的多い。また、統一新羅時代初期と考えられる軒丸瓦では、丸瓦先端部凸面をヘラ切りしたものもある。瓦当裏面には、古新羅時代と同様に叩き痕跡を残すものもあるが、手や布(?)などによるナデが多く、ハケ状工具によるものもある。

範型は、範キズの様子からみて、木製のものがあることは確実だが、土製の範型も金丈里窯跡で出土している。これは、円形で瓦当側面にかぶらないタイプのものである。

軒平瓦 軒平瓦は、唐草文を中心として、並列花文、蓮華文、宝相華文などの植物系文様と飛鳥文、麒麟文、竜文などの動物系文様が見られる。唐草文は均整唐草文が多く、なかでも外から中央に向かうものが比較的多い。外区には密な珠文を飾るものが多い。

軒平瓦の顎部は、初期のものは無顎であるが、すぐに有顎のものが見られるようになり、無顎のものはなくなっていくようである。そして有顎のものは、顎部に唐草文などの文様を飾る例がある。顎の幅は2～3cmほどで、日本の軒平瓦に比べるとやや狭いようである。

製作技法に関しては、初期の無顎のものは、範型にまず瓦当部の粘土を入れて、その上に平瓦を置き、その凹凸両面に補強粘土をつけて、無顎の軒平瓦を完成させている。このとき、接合する平瓦の先端部はそのままか、または接合用のヘラキズをつける。また、一部には、平瓦部を先に厚めに作り、その先端部にキズを入れて、瓦当裏面に接合するものもあるようである。そして、平瓦の側面まで包み込んだ、いわゆる包み込み技法のものがある。

有顎のものは、軒丸瓦と同じように、瓦当裏面上部に段や溝状のものを作り、そこに平瓦を接合するものと、範型に瓦当部の粘土を入れて、上部に平瓦を置き、凸面側に顎部となる粘土を接合するものがあるようである。そのとき、平瓦の端部にヘラなどによるキズを入れ、接合するものが比較的多い。一方、瓦当裏面にキズをつけているものもある。また、接合する平瓦の先端部の凹面・凸面をヘラケズリしているものもある。そして、平瓦の側面まで包み込んだ包み込み技法のものがある。

範型については、範キズの様子から、木製のものがあることは確実と考えられるが、土製の範型も金丈里窯跡で出土している。これは、瓦当側面にかぶらないタイプのものである。また、有顎のものには、前述のように唐草文などが型押しされた例があり、これらは専用の型が使用されたものと考えられる。

その他 丸瓦・平瓦については、古新羅時代か統一新羅時代かを区別できないものが多いため、一緒に説明する。

丸瓦は、行基式と玉縁式の両方ともある。玉縁式丸瓦は、凸面をナデ消すものが多い。丸瓦の分割は、両側縁とも凸面からのものと、凹面からのもの、そして一方を凸面から、他方を凹面から行ったものがある。破面はそのままのものが多いが、面取りするものも少なくない。

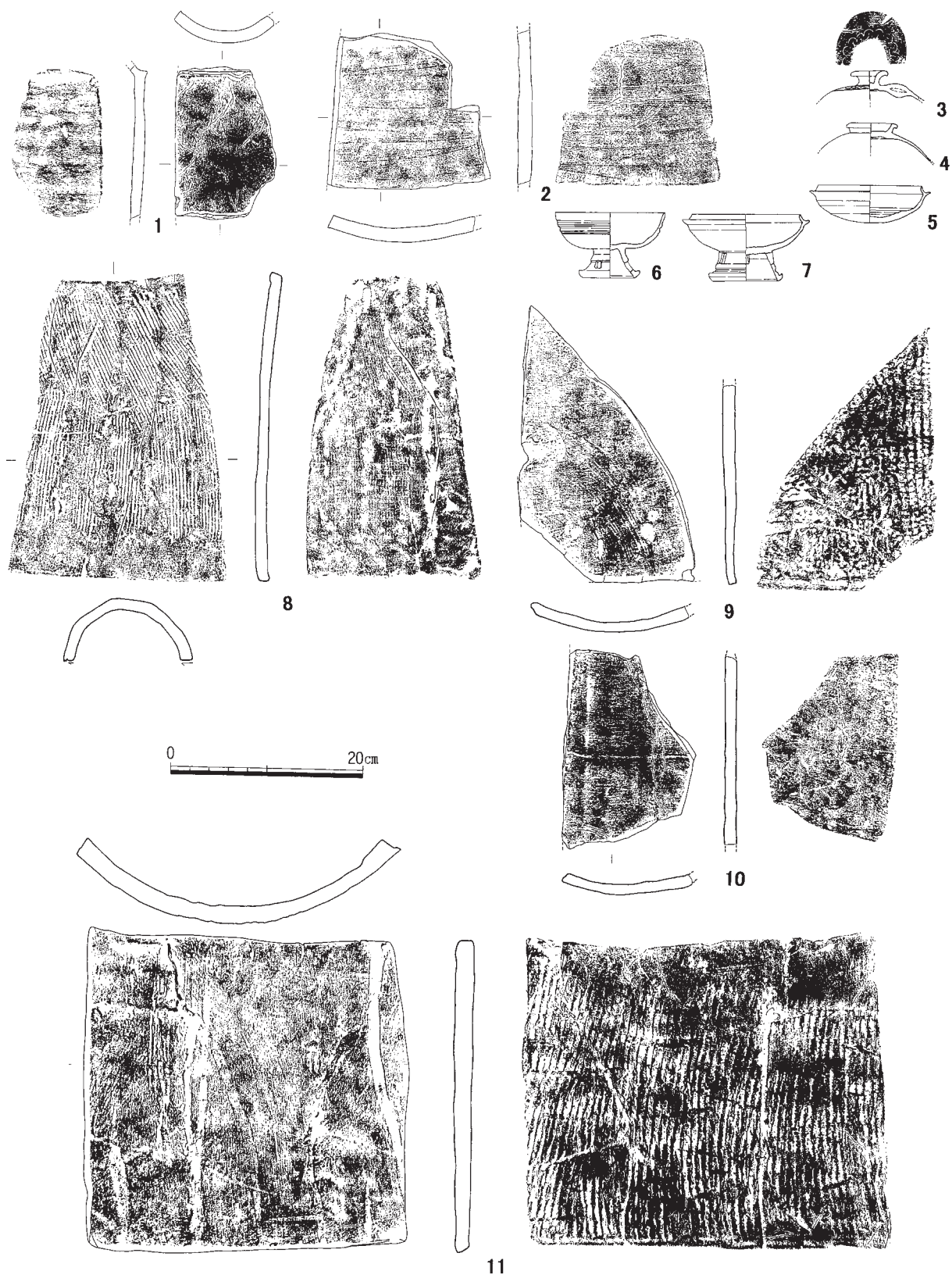


図12 古新羅時代(勿川里窯跡群)の丸瓦・平瓦・土器(1/6)
 1～7:C-1-2-3号窯跡灰原、8:A-VII-4竪穴遺構、9・10:C-1-3-25号竪穴遺構、
 11:C-1-3-35号竪穴遺構

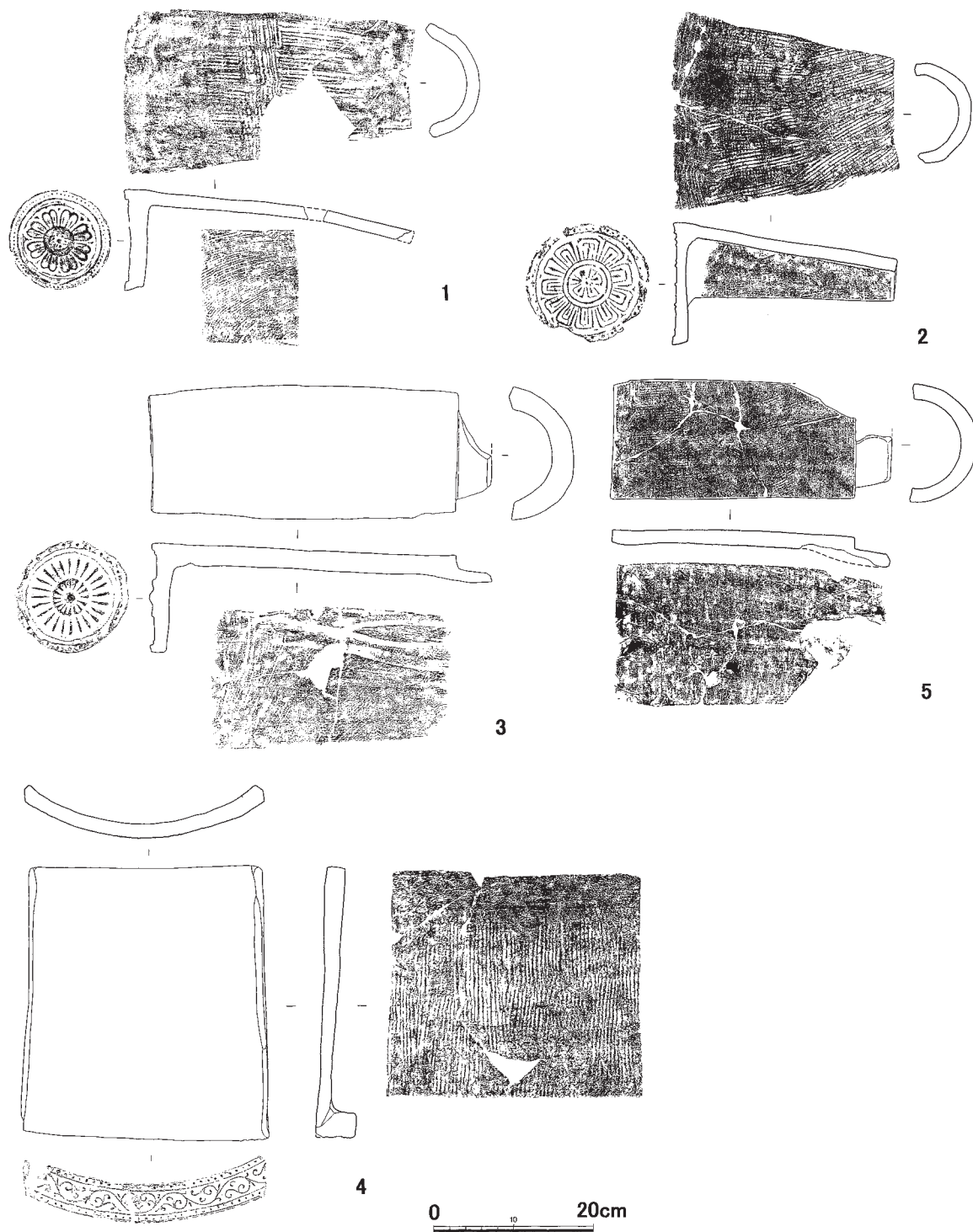


図13 統一新羅時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦(1/8) 1~5:天官寺跡

丸瓦・平瓦ともに、古新羅時代には、泥条盤築技法によるものと、内型を使用したものがある。統一新羅時代に泥条盤築技法によるものがあるかどうかは確認できていない。

玉縁式丸瓦で内型を使用したものは、内型が玉縁部までおよばず、布目が筒部までで玉縁部はナデによるものと、内型が玉縁部までおよび、布目も筒部から玉縁部まで一連のものがある。両者の時間的な関係は、現時点ではよくわからない。

平瓦で内型を使って制作されたものは、凹面に模骨の杵板痕跡を残すものと、杵板痕跡を残さない円筒桶と呼ばれる内型を使用したものがある（崔兌先 1993）。杵板痕跡を残す平瓦は高句麗や百済で一般的に見られ、軒丸瓦のところでも述べたように、それらの系譜の瓦作りとともに入ってきたと考えられる。一方、杵板痕跡を残さない円筒桶を使用した平瓦は、高句麗や百済では知られていない。ほかのどこかから入ってきたのか、それとも新羅で独自に生み出されたのであろうか。現時点では、円筒桶を使用した平瓦は、少なくとも古新羅時代には存在するようである（趙成允 2000）。

丸瓦・平瓦ともに、泥条盤築技法によるもの以外は、粘土紐巻きつけは少なく、粘土板巻きつけが主流のようである。平瓦の分割は凹面側からなされ、破面はそのままのものが多い。一枚作りに関してはよくわからない。

叩き文様は平行文が多いようであるが、そのほかに縄目文、格子目文、特殊文がある。叩き板は、古新羅時代は短板と中板があり、長板は統一新羅時代に入ってから見られるようになるようである。

F おわりに

以上、朝鮮半島の瓦について、楽浪瓦、高句麗瓦、百済瓦、新羅瓦の順に概観してきた。

楽浪瓦は、当然のことながら中国との関わりが深く、中国瓦の詳細な検討が進めば、どの地域からの影響なのか、地元で変化したものなのかが明らかになると考えられる。

高句麗瓦は、初期のものは中国との関わりで出現したとみられるが、4 世紀中葉ころからは独自の展開が推測される。ただ、細かくみると、途中で中国から影響が入っている可能性も考えられる。とくに、これまでほとんど明らかにされていない地方の瓦を検討すれば、より多様な高句麗瓦がわかってきそうである。

百済瓦は、漢城時代とそれ以降の瓦で大きく様相が異なる。ただ、どちらもまず、基本的には中国との関係が想定できそうである。その一方で、楽浪瓦や高句麗瓦との関係も当然推測され、単純ではない。また、熊津時代以降の瓦に関しても、初期の中国南朝からの影響から脱した百済瓦を作るとともに、新たな中国からの影響も受け入れ、展開したようである。

古新羅瓦は、高句麗や百済の瓦の影響下に始まり、展開したと考えられるが、その間に中国の影響もありそうである。統一新羅時代の瓦については、逆に、唐との関係が注目されている

が、百済滅亡時の瓦工人の移動や高句麗からの影響もありそうである。

このように、朝鮮半島の瓦作りに関しては、中国との頻繁な交流とともに、朝鮮半島内部での影響、それぞれの内部における展開が絡み合って、複雑に展開したものと推測される。

そして、こうした複雑なあり方が、日本にも入ってきている。百済、高句麗、古新羅、統一新羅、さらにそれらの国境地域の地方からも、多様な瓦作りが、人の移動とともに日本へ伝えられたようである。

小稿をなすにあたり、以下の多くの方々や機関のお世話になった。末筆ながら記して、謝意を表したい。失礼ながら、敬称は省略させていただいた。また、ここに明示できなかった方も多い。御容赦を乞う次第である。

尹根一、金誠龜、金鍾萬、金有植、李鮮馥、李南圭、權五榮、申鍾國、朱岩石、賀雲翱、毛利光俊彦、山崎信二、佐川正敏、花谷浩、小澤毅、今井晃樹、林正憲、高田貫太、井内潔、早乙女雅博、谷豊信、白井克也、小田富士雄、武末純一、国立文化財研究所、国立扶余文化財研究所、国立慶州文化財研究所、国立慶州博物館、国立扶余博物館、韓神大学校博物館、東京国立博物館、井内古文化研究室

表1 朝鮮半島の丸瓦・平瓦の製作技法（作成途中）

		楽浪郡	高句麗	百 済		新 羅	
				漢城時代	熊津・泗沘時代	古新羅時代	統一新羅時代
形 態	行基式	なし?	○	なし?	○	○	○
	玉縁式	○	○	○	○	○	○
泥条盤築技法		○		○		○	
素 材	粘土板		丸：○,平：○	丸：○,平：○	丸：○,平：○	丸：○,平：○	丸：○,平：○
	粘土紐		丸：○,平：○	丸：○,平：○	丸：?,平：?	丸：△,平：△	丸：△,平：△
分割方向	丸 瓦	凸	凸	凸	凸	凸,凸+凹	凸,凸+凹,凹
	平 瓦	凹	凸(凹)	凸,凹	凹	凹	凹
面取り	丸 瓦	無：○	無：○,面：○	無：△,面：◎	無：○,面：◎	無：○,面：○	無：◎,面：○
	平 瓦	無：○	無：○,面：○	無：△,面：◎	無：○,面：○	無：○,面：○	無：○,面：△
叩き文様		縄目◎	縄目○,格子○, 平行△,特殊	縄目△,格子◎, 平行△	縄目△,平行◎	平行,格子,特殊	格子,平行,特殊

*○：ある、◎：多い、△：少しある、?：不明

*凹、凸：凹面、凸面どちらの面から分割のためのヘラ切りを行っているかを示す。

凹+凸：一側面を凹、もう一側面を凸面から切ったもの。

参考文献

- 井内 功 1977 「楽浪郡時代の造瓦に関する覚書」『井内古文化研究室報』18
- 井内 潔 1976 「楽浪郡時代の標識的造瓦技法」『井内古文化研究室報』16
- 井内 潔 2002 「中国南朝屋瓦の変遷」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』
- 井内古文化研究室編 1976a 『朝鮮瓦塼図譜 I 楽浪・帶方』
- 井内古文化研究室編 1976b 『朝鮮瓦塼図譜 II 高句麗』
- 井内古文化研究室編 1977a 『朝鮮瓦塼図譜 IV 新羅2』
- 井内古文化研究室編 1977b 『朝鮮瓦塼図譜 V 新羅3』
- 井内古文化研究室編 1978 『朝鮮瓦塼図譜 III 百済・新羅1』
- 井内古文化研究室編 1981 『朝鮮瓦塼図譜 VII 総説』
- 井内古文化研究室編 1993 『朝鮮瓦塼百粹』
- 尹根一 1978 『統一新羅時代瓦当の製作技法に関する研究』檀国大学大学院硕士学位請求論文（韓国）
- 大脇 潔 1991 「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集』IX、奈良国立文化財研究所
- 大脇 潔 2005 「老北京胡同薈紀行—東アジアにおける軒平瓦の変遷—」『古代摂河泉寺院論叢集』2、摂河泉古代寺院研究会
- 賀雲翱 2005 『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社（中国）
- 亀田修一 1981 「百済古瓦考」『百済研究』12、忠南大学校百済研究所（韓国）
- 亀田修一 1984 「百済漢城時代の瓦に関する覚書」『尹武炳博士回甲記念論叢』（韓国）
- 亀田修一 1996 「韓半島南部地域の瓦当裏面布目軒丸瓦」『碩晤尹容鎮教授停年退任記念論叢』（韓国）
- 亀田修一 2002 「韓半島から日本への瓦の伝播—竹状模骨瓦について—」『清溪史学』16・17 合輯（『悠山姜仁求教授停年記念東北亜古文化論叢』（韓国）
- 亀田修一 2006 『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- 韓国文化財保護財団 1999 『慶州競馬場予定敷地 C— I 地区発掘調査報告書』（韓国）
- 韓神大学校博物館 2003・2004・2005 『風納土城』III、IV、VI、VII（韓国）
- 吉林市文物考古研究所・集安市博物館 2004 『集安高句麗王陵』文物出版社（中国）
- 金元龍・任孝宰・林永珍 1987 『夢村土城東北地区発掘報告』ソウル大学校博物館（韓国）
- 金元龍・任孝宰・朴淳發 1988 『夢村土城東南地区発掘報告』ソウル大学校博物館（韓国）
- 金元龍・任孝宰・朴淳發・崔鍾澤 1989 『夢村土城西南地区発掘報告』ソウル大学校博物館（韓国）
- 金誠亀 1992 「百済の瓦塼」『百済の彫刻と美術』公州大学博物館（韓国）
- 金誠亀・申光燮ほか 1988 『扶余亭岩里窯跡（I）』国立扶余博物館（韓国）
- 金誠亀 1990 「扶余の百済窯跡と出土遺物に対して」『百済研究』21、忠南大学校百済研究所（亀田修一訳 1991『古文化談叢』26）
- 金有植（田福涼訳） 2004 「三国時代軒平瓦の発生に関する小考」『鹿園雜集』6、奈良国立博物館
- 慶熙大学校中央博物館 2005 『高句麗瓦当』（韓国）
- 權五榮・韓志仙 2008 「ペールを脱ぐ百済王城の文化相—最近の風納土城慶堂地区発掘成果—」『季刊韓国の考古学』9、周留城出版社（韓国）
- 国立慶州博物館 2000 『新羅瓦塼』（韓国）
- 国立慶州文化財研究所 2004a 『慶州菰谷洞・勿川里遺跡—慶州競馬場予定地 A 地区一』（韓国）
- 国立慶州文化財研究所 2004b 『慶州天官寺址』（韓国）
- 国立慶州文化財研究所 2006 『月城垓字発掘調査報告書II』（韓国）
- 国立公州博物館 1999 『大田月坪洞遺跡』（韓国）
- 国立扶余博物館 2000 『陵寺』（韓国）
- 国立文化財研究所 2001・2002・2005 『風納土城』I、II、V、VIII（韓国）

- 崔兌先 1993 『平瓦製作法の変遷に対する研究』慶北大学校文学碩士学位論文（韓国）
- 崔孟植 1999a 「百濟平瓦の一類型に関する小考—瓦内面繩蓆文に関して—」『史学研究』58・59 合集号（韓国）
- 崔孟植 1999b 『百濟平瓦の新研究』学研文化社（韓国）
- 崔孟植 2004 「三国軒平瓦の始原に関する小考」『文化史学』21、韓国文化史学会（韓国）
- 崔孟植 2006 『三国時代平瓦研究』周留城出版社（韓国）
- （財）百濟文化開発研究院 1983 『百濟瓦磚図録』（韓国）
- 清水昭博 2003 「百濟『大通寺式』軒丸瓦の成立と展開」『百濟研究』38（韓国）（清水昭博 2004 『日本考古学』17）
- 清水昭博 2008 「古新羅瓦の遡源に関する検討—有軸素弁蓮華文軒丸瓦を中心として—」菅谷文則編『王権と武器と信仰』同成社
- 順天大学校博物館 2002 『光陽龍江里遺跡Ⅰ』（韓国）
- 順天大学校博物館 2005 『光陽馬老山城Ⅰ』（韓国）
- 申光燮・金鐘萬 1992 『扶余亭岩里窯跡（Ⅱ）』国立扶余博物館（韓国）
- 徐五善 1985 『韓国平瓦文様の時代的変遷に関する研究』忠南大学校碩士学位請求論文（韓国）
- 薛貞蓮 1976 「百濟蓮華文瓦当編年に関する研究」『月刊文化財』1976—6（韓国）（関口広次訳 1978 『古文化談叢』4）
- 大田産業大学郷土文化研究所 1994 『鷄足山城西門址調査概報』（韓国）
- 谷 豊信 1984 『西晋以前の中国の造瓦技法について』『考古学雑誌』69—3
- 谷 豊信 1989 「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察—墳墓発見の瓦を中心として—」『東洋文化研究所紀要』108
- 谷 豊信 1990 「平壤土城里発見の古式の高句麗瓦当について」『東洋文化研究所紀要』112
- 忠南大学校百濟研究所編 1972 『百濟瓦磚図譜』（韓国）（同訳 1976 『百濟の古瓦』学生社）
- 忠南大学校百濟研究所 2005 『大田鷄足山城』（韓国）
- 趙成允 2000 『慶州出土新羅平瓦の編年試案』慶州大学校碩士学位論文（韓国）
- 朝鮮総督府 1925 『楽浪郡時代ノ遺跡』図版上下2冊
- 朝鮮総督府 1927 『楽浪郡時代の遺跡』本文
- 朝鮮総督府 1929 『高句麗時代之遺跡』図版上册
- 沈光注・キムジュホン・ジョンナリ 1999 『漣川瓠蘆古壘精密地表調査報告書』韓国土地博物館（韓国）
- 程永建 2007 『洛陽出土瓦当』科学出版社（中国）
- 東京大学文学部考古学研究室 1965 『楽浪郡治跡』
- 東国大学校慶州キャンパス博物館 2002 『慶州孫谷洞・勿川里遺跡（Ⅲ）—競馬場予定敷地（史跡430号）B地区—』（韓国）
- 戸田有二 2001 「百濟鐙瓦製作技法について（Ⅰ）—特に漢城時代と熊津時代を中心として—」『百濟文化』30（韓国）
- 戸田有二 2004 「百濟鐙瓦製作技法について（Ⅱ）—熊津・泗水時代における公山城技法・西穴寺技法・千房技法の鐙瓦—」『百濟研究』40（韓国）
- 奈良国立文化財研究所 1998 『北魏洛陽永寧寺』
- 白種伍 2006 『高句麗瓦の成立と王権』周留城出版社（韓国）
- 朴容埴 1976 「百濟瓦当の体系的分類—軒丸瓦を中心として—」『百濟文化』9、公州師範大学百濟文化研究所（韓国）（泊勝美訳 1978、田村圓澄・黄壽永編『百濟文化と飛鳥文化』吉川弘文館）
- 菱田哲郎 1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』69—3
- 扶余文化財研究所 1995 『扶蘇山城発掘調査中間報告』（韓国）

夢村土城発掘調査団 1985 『夢村土城発掘調査報告書』（韓国）

毛利光俊彦 1990 「軒丸瓦の製作技術に関する一考察—範型と枷型—」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館

毛利光俊彦 1991 「布目押圧技法の展開」『平城宮発掘調査報告XⅢ』奈良国立文化財研究所

山崎信二 2007 「7世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本の関係」『日韓文化財論集Ⅰ』奈良文化財研究所

林至徳・耿鉄華 1985 「集安出土高句麗瓦当及其年代」『考古』1985—7（中国）（緒方泉訳 1988「集安出土の高句麗瓦当とその年代」『古代文化』40—3）

挿図出典（いずれも一部改変引用）

図1—1・4、図3—4：井内古文化研究室 1993、図2—1：林・耿 1985、図2—2、図3—1～3：吉林市・集安市 2004、図4—3・5：權五榮・韓志仙 2008、図5—4・6・10：国立文化財研究所 2001、図7—3：扶余文化財研究所 1995、図7—4、図11—6・7：山崎 2007、図8—1～5：国立扶余博物館 2000、図9—2～5：国立公州博物館 1999、図9—6：順天大学校博物館 2002、図10—4・7、図12—1～7、9～11：韓国文化財保護財団 1999、図10—8：崔孟植 2006、図12—8：国立慶州文化財研究所 2004a、図13：国立慶州文化財研究所 2004b

以下の資料は古く採拓・実測させていただいた資料であり、今回初めて提示させていただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。

図1—2：井内古文化研究室所蔵。資料調査にあたっては井内潔氏にお世話になった。

図11—1～3・4：東京国立博物館所蔵。資料調査にあたっては早乙女雅博氏、谷豊信氏、白井克也氏にお世話になった。